

---

10years

sofiee

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

10years

### 【Nコード】

N9577B

### 【作者名】

sofiee

### 【あらすじ】

ある日届いた一通の往復はがき。それは、今は疎遠になってしまった、かつての親友の結婚式の招待状だった。鮮明に蘇る、まるで宝石のようにきらきらしていたあの頃の記憶。あの時、すれ違ったまま前に進めなくなってしまう3人の心。そんな、3人がそれぞれ別の再会を通じて再び自分の道を歩き始める愛と友情の物語。

## 第1話 近況

・・・  
・・・  
・・・忘れられない思い出達・・・  
・・・いつもどおりの学校の昼休み・・・  
・・・いつもどおりの風景・・・  
・・・いつもどおりの友達・・・

「シユウ！学校終わったからお前も来るだろ？」

「そうか、今日だったっけ！？行くに決まってるんだろ。」

「あー、長いなあ、長すぎる！一分一秒をこれほど長く感じる日はないぜ。」

「しかし掘り出し物だったよな。中古とはいえ、マフラーにセパハんにクラッチまで…それに、シートもタンDEMにしてあるしな。」

「日頃の行いだな。やっぱ！」

昼休みの廊下に、少年たちの笑い声が響く。

その彼らに、一人の少女が遠くから手を振っている。

『おい！二人して今度は、何を悪巧みしてるの？』

「斎藤、お前普通に登場できないのか？」

「ああ、ミサキ、タケルのバイクが今日ついに納車なんだってよ。」

「そ。ガッコ終わったら速攻で店に行くからよ！」

『なんてバイクだっけ？…オメガ…だっけ？』

「そりゃ時計だろ？ガンマだよ。ガンマ。RGV-！」

『そんなのどっちでもいいじゃない。まあ、せいぜい長生きする』

とね。』

「そんなのだと？絶対乗せねえ。泣いて頼んでも乗せてやらん。」

『あ、うそうそ！むきになっちゃって。郷谷さあ、まだまだ修行が足りないわよ。』

「ちくしょう…斎藤、お前も来い！オレの宝物をその目に焼き付けさせて二度とその無駄口叩けない様にしてやる！」

『あーら、できるもんならやってごらん』

「なあ、タケル。名前付けようぜ、名前。」

『シユウ、それいいね。うーん…、そうねえ、まあ、なんにしても

【ミサキ】ってのは入れなきゃなあ…』

「ん？ちよつと待て！今、なんか妙な単語が出てきたぞ？」

『細かいこと言ってるんじゃないわよ！黙ってアタシに捧げなさい！』

「やっぱ、乗せん！何があっても乗せん！」

『あははは、タンクにアタシのキスマークつけてあげるから機嫌直しなさいよ。』

「不吉なことするんじゃない！」

『…よし、そのケンカ買った！』

「お前らなあ…、毎回、毎回…、もう止める気もせん…。」

…ずっと続くと思ってた…

…ずっと…

その日、郷谷<sup>むらやま</sup> 武<sup>たけの</sup>はいつものように、朝6時30分に目を覚ました。顔を洗って、窓を開けると、アパートの中隅々まで日の光を浴びて、最近では珍しく気分のいい目覚めだった。

(今日は水曜日だったっけ。)

キッチンに向かい、コンビ二弁当やらカップラーメンやらの残骸を手早くゴミ袋に詰め込む。

キッチンには少し大きな鍋やフライパン、包丁(3本セット)をはじめ、その他29歳一人暮らしの男性の平均以上の調理器具や調味料は置かれていたが、実のところ自炊らしきことをした記憶に触れようとすると、3年以上も遡らなければならない。

料理ができないわけではない。タケルにとっては、その時間を睡眠にあてたいと切に願ったが故の結果でしかないのだ。

アパートから歩いて45秒のところにある地域指定のごみ収集場所に袋を放り投げる。

そして、さらに30秒ほど歩いて自動販売機でタバコを買うのが日課になっている。

アパートに戻り、玄関の安っぽいドアを開けると足元に何か白いものが見えた。

(あれ?こんな昨日あったかな?)

それは、1通のそっけない文面の往復はがきだった。差出人には、『坂本 修二・松田 千晶』とあった。

(サカモト…)

(シユウか！あいつもついに…)

シユウは、今でこそ疎遠なってしまうているが、タケルの中学・高校時代の親友である。

タケルの脳裏に忘れかけていたあの頃の様々な思い出が津波のように押し寄せ、突風のように吹き抜けていく。

(やばい、もう、会社に行かなきゃ。)

タケルは、いつものように車のキーを手に取りかけたが、やめた。

(ふむ、今日はこっちにしよう)

ヘルメットとグローブを手にとって、勢い良くエンジンを掛ける。

空冷し型2気筒エンジンの独特の音がタケルの心を昂ぶらせる。

ヘルメットを被り、愛車にまたがると、もう一度軽くエンジンを吹かして走り出した。

久しぶりに最愛のバイクに乗ったタケルが、ヘルメットの中で考えていたのは、今朝の(昨夜の)シユウからのおめでたいニュースのことではなかった。

高校時代に、誰もが経験する楽しい思い出、つらい思い出、友達とした悪ふざけ…。そして…、

(もしかしたらアイツにもあえるかな…、まあ、無理だろうなあ…。)

そう、『アイツ』のことなんかを…。

2

「電話してもゼーんぜん出ないし、ずいぶん待たされたんだから。」

6

不機嫌そうな口調で言うと、アイは、最近お気に入りといっていた生オレンジサワーを二口飲んだ。

その夜、タケルはアイとアパートの近所にある、いつもの居酒屋に来ていた。

アイと付き合い始めてから、もうすぐ二年が経とうとしている。

「悪い。でも仕方ないだろ。バイクに乗ってたんだから。さすがにバイク乗りながらメット越しに電話できないよ。これでも一度家に帰ってバイク置いてから急いできたんだぜ。」

「でも、なんでまた、いきなりバイク通勤にしたの？」

「朝の渋滞きついし、あつたかくなってきたからね。なんか乗りたかったんだ。」

「ふーん。」

アイの表情からは、さっきの不機嫌さはすっかり消えていた。

タケルは3歳年下の彼女のそんなさっぱりしたところが好きだった。

「なんかあったのかと思ってさ。タケル君、前に言ってたじゃない。何だっけ…いいことでも悪いことでも気分が大きく切り替わる時は、

考えるのをやめてバイクに乗ると、気分が落ち着く…とかなんとかさ。」

「何にもないよ。とにかく乗りたかったんだ。おかげで今朝はいつもより20分も早く会社に着けた。なんだ、アイ、心配してくれたの？」

左隣に座っているアイに、ちよつと意地悪く訊くと

「いや、全然。」

と言って、彼女は悪戯っぽく笑った。

店を出ると、夜風が優しく、とても気分が良かった。

地元の中学校のフェンス沿いの歩道を並んで歩く。

「あーあ、桜もすっかり散っちゃったね。」

「そうだな。また来年まで、お預けだな。」

タケルとアイは割合近くに住んでいるが、タケルがアイの家まで送ると言うと、アイは、首を横に振った。

「大丈夫、今日は風も気持ちいいし、自転車だから。」

「そっか、じゃあ、明るい道通って帰りなよ。」  
「サンキュ。またね。あ、明日もバイクなの？」

と、ちよつと意地悪に笑う彼女にタケルは優しくキスをした。

「明日の朝、目が覚めたら決めるよ。ちゃんと電話には出られるようにするから。」

「ほー、そのセリフ、メモしとかなきゃ。」

3

（何かあったのか…。相変わらず鋭いなあ。）

アパートに戻ったタケルは、軽い罪悪感に苛まれていた。

（何で、アイにヤツの結婚の話をしなかったのだろう…。）

テーブルの灰皿を手元に引き寄せて、タバコに火をつけた。  
細く立ち上る薄紫色の煙を眺めながら、まだ少し酔いの残った頭で  
ぼんやりと思いを巡らせる。

タケルはアイに対して不満らしいものは何一つといって良いほどない。

3年前、大学時代の友人のタカユキが、勤め先の後輩だと言ってタケルに初めてアイを紹介した時、タケルは彼女を「頭良さそうなコだなあ」と思った。

実際、彼女と話をしていると、タケルの知らない話題でもきちんと解かるように、しかも話の流れを止めないように補足を入れながら話をする事ができたし、こちらサイドの彼女の知らない話題にも、すばやい理解を示した。

これは、冷静に考えて凄いことだと思う。

タケルも仕事上、人と会う機会が多いので、読解力には多少の自信を持っているのだが、この子には敵わないと思った。

タカユキも、

『アイの仕事振りはとてもてきぱきとしていて、他の男性社員と比べても光るものがある』

『こりゃ、オレもつかつかしてつとやばいわ…。』と言っていた。

タケルはそんなアイと話をしていて、とても楽しかった。

そして、時に目から鱗の落ちるような、斬新なものの考え方をするアイに好感を持った。

3人と同じB県N市内に住んでいるということもあって、その後たびたび3人で会う機会があった。

大抵、仕事の後にどこかのファミリーストランか、居酒屋で待ち合わせをするケースが多く、休日のスケジュールが合えば3人でド

ライブに出かけたりもするようになった。

その車中、助手席の窓を半分開けて座っていたアイは、くせの無い茶色いショートのが髪が風になびくのも大して気にせず、子供のよう

に黒目がちな大きな瞳を輝かせて「いい風だね。」と言った。タケルは運転席から、その横顔を見て、とてもきれいな瞳をしていると思った。

その時の話題は、確か（タカユキが言い出した）、

『男は女を部屋に招く時に、アダルトビデオをちゃんと隠しておくべきか』

といった、このシチュエーションにそぐわない、実にくだらけなものだったが、その時のアイの話は今でも強く印象に残っている。

「女ってなんでだか男の人の部屋を家捜ししたくなるわけなのよ。エッチなもの置いてないかとか、他の女の痕跡はないか、とか。それも、あんまり褒められたもんじゃないよね。」

エッチなビデオなんかは、あんまり気分は良くないにしても、まあ、ぎりぎりセーフ。

「ただ、他の女の痕跡は許せないでしょ？男もそれを逆手にとってわざと見つけやすいところにビデオ置いておいて、ホントに見つけられないものを隠すカモフラージュにしたりするらしいからなあ。」

アイは『らしい』のところになわざと力を入れて、二人の反応を大袈裟に伺う。

アイは、結局、浮気しなければどっちでもいいんじゃない？と言った。

タケルとタカユキはタジタジだったが、タケルはせめてもの反撃のつもりで、

「ふーん、そんな悪い男がいたんだ？」

と、とぼけた口調で聞くと、

「それは、秘密！」

と、人差し指を唇に当てて、悪戯っ子のように笑った。

もし、誰かに『付き合いおうと思ったきっかけは？』と訊かれたらこの時の笑顔が思い浮かぶだろう。

あの頃の3人のような、素敵な笑顔だったから……。

## 第2話 再会

．．．いつもの廊下にいつもの2つの人影．．．  
．．．ひとつだけいつもと違うこと．．．  
．．．その手には卒業証書の筒があった．．．  
．．．もうひとつの影が背後からそろそろと近づく．．．  
．．．この場所でのこの見慣れた風景も今日で最後．．．

『空きアリー！』

両腕を使った、背後からのラリアット＋ヘッドロックがふたりに見事に決まった

「うわーっ！」「だあーっ！」

『あははは、今日で最後だったのに、変わり映えしないねー、君らは！』

「げほっ。その最後の日に一番いつもどおりなのは自分じゃねえか」

『あーら、最後だから、その締めくくりじゃない。』

「ミサキ、本気で効いたぞ。今のは……。」

「サイトー！お前を待っててやったんだぞ。」

『あいかかわらず郷谷はわかってないね。女には女の準備ってもんがあるのよ』

「やれやれ、女の準備ってヤツをして結局やることはそれか……。」

彼女はタケルのそんなつつこみは完全に無視して、

『さあ、皆の者！もう思い残すことはないかー？』

「まあ、上出来だったんじゃないの？」とシユウ。

「ふむ、楽しかったかな？」とタケル。

『なに、二人とも。今日が何の日だか解かってるの？』

「卒業式。」と二人。

『解かってればよろしい！さあ締めくくりにパァッと遊びに行くわよ！』

「へーい。」

4月からは、3人ともそれぞれ別々の学校に進学する。

・・・その表情にはキラキラ光る笑顔があつた。・・・

・・・3人は揃ってもう戻れない一步を踏み出した。・・・

・・・その素敵な魔法の結界の外へと・・・

6日後の夜、タケルが自宅で風呂から上がってテレビを観ていると、携帯が鳴った。

プライベート用の着メロである。

ディスプレイを見ると『シユウ』からだった。

『よう、タケル！しばらくだな！返信葉書届いたぞ。』

電話の向こうの親友の声は、当時と全く変わっていないなかったので、タケルはなんだかとても嬉しかった。

「ああ、届いたか。シユウ、こんな大ニュース、何で今まで黙ってた？」

『悪い、何か久しぶりだし、ちょっと照れ臭くてな。まずは、葉書送ってご機嫌伺ってみた。』

「まあ、オレも久しぶりなんで、なんか電話するの気が引けてたから、返信葉書送ってご機嫌伺おうかと思ってたんだけどね。」

電話の向こう側で懐かしい笑い声がした。

『で、式と披露宴から来られるんだな？』

「当たり前だろ。でも、祝儀は期待するなよ。貧乏なんだから。」

『タケルなんかに期待してないよ。期待してるのは、会社の偉いさなんだね。ここで、しくじると大誤算だから、せいぜいゴマ擦っとくよ。』

タケルは、なんかとは何だ。祝儀出さないぞ。と言うと、シユウは笑いながら謝った。

懐かしい声を聞いて、一瞬頭の中が高校時代に戻り嬉しかったのと同時に、現実には二度とあの頃には戻れない寂しさを感じた。

『なあ、タケル。週末会わないか。ちょっと頼み事があるんだ。』

シュウがいきなり改まって言うと、

「スピーチしてくれって言うんだろ？絶対俺のどこ来るって信じてたよ。」

タケルは、大袈裟に言った。

一瞬、シュウは驚いた様子だったが、

『さすがだな。相変わらず話が早い。もう用事が片付いちゃったよでも、とにかく久しぶりに飲もうぜ。』

「ああ、いいよ。お前も今色々忙しいだろうから、時間と場所はそっちに合わせるよ。決めたら電話くれ。」

『悪いな。じゃあまた電話する。』

2

「こつちだ、タケル！」

駅前で大きく片手を上げたシュウを見つけて、タケルも左手を軽くあげる。

「悪いな。わざわざこつちまで出てきてもらっちゃって。」  
「結婚準備で色々忙しいんだろ？まあ、気にするな。」

シユウは現在、タケルと同じ沿線沿いの7駅先に住んでいる。  
久しぶりに見る親友は、もともとタケルから見ても「かつこいい」  
部類に入る顔立ちだったのだが、昔よりもずっと大人びていて、逞  
しくなったように見えた。

「近くの店でいいだろ？」

「ああ。」

タケルはシユウに連れられてちよつと静かな居酒屋に入った。  
店の少し奥まったところの座敷の席に通され、二人は向かい合つて  
座つた。

「しかし天下のシユウジ様もついに、年貢の納め時だねえ。高校の  
時は、『35までは、独身貴族で行く！』とか言つてたのに。」

久しぶりの再開とシユウの婚約を祝う乾杯の後、タケルは昔のよう  
に少し毒ついてみた。

「まあ、色々事情もあつてさ。実は嫁さんのお腹にもう『いる』ん  
だ。」

「そうなのか。どおりで急だと思つたよ。でも今時、珍しくもない  
さ。それに、特に後悔してるようにも見えないぜ。」

「わかります？」シユウはちよつとおどけてみせる。

「なんだよ、いきなりノロケか？」

その後、まだタケルの会つたことの無いシユウの婚約者のことや、  
子供の誕生予定が年末頃だということ、彼女の両親に挨拶に行った

時にどれだけ緊張したかということや、タケルの近況報告、アイの事、披露宴当日の友人代表のスピーチの正式な依頼、結婚式と披露宴にどれだけお金が掛かるかなどといったことを話した。

とにかく楽しかった。タケルは『酒が美味しい』ってこんなことを言うのかと思った。

「…あのさタケル…アイツのことなんだけど…。」

二人の飲み物がビール、ウーロンハイから日本酒へと移った頃、シユウが少し間を置いてから切り出した。

「アイツ？」

「斎藤 美咲。」

「え？」

一瞬、聞き違いかと思ったが、間違いなくシユウは『サイトウ ミサキ』と言った。

タケルは、その名前に心が大きく揺れ動くのを感じた。心の奥の長い間眠っていた部分が揺さぶられたような感覚だった。

「実はな、新婦側の友人関係の招待客の中にこの名前があつてさ。」

「新婦側の？まさか。同姓同名じゃないの？」

「俺もそう思ったんだけど、嫁さんにさりげなく聞いてみたら、どうもあの斎藤 美咲本人に間違いなみないなんだよね。」

多分、嫁さんも、ミサキ本人も知らないんだろうけど。」

斎藤 美咲はタケルとシユウの高校のクラスメートであり、タケルにとっては、もう一人の親友であり、シユウにとっては元彼女であ

った。

タケルの思春期は、この二人と共にあったと言っても過言ではない。もうずいぶん前の話だから、時効なんだろうがシユウの心配はもつともだと思っ。

何しろ、披露宴の席に不可抗力とはいえ、新郎の昔の恋人が、全く接点のないと思っ込んでいた、

新婦の友人の席に座っているなんてことが、現実になりそうなのだから…。

「当日、いきなり式場で鉢合わせって事態は避けたいからなあ。まさか、二人が友達同士だったなんて夢にも思わねえもんよ。なんとか事前にミサキに連絡取りたいんだけど、アイツ何度か引越しているらしくて…。」

まあ、現住所は名簿でわかるんだけど…、今は、U県に住んでるらしい。

でも、いきなり手紙送るのも気が引けるし。

嫁さんにも変な心配させられないからなあ。」

そりゃそうだろう、ましてお腹には赤ちゃんがいるのだから…。

シユウは、両手を広げて「やれやれ」のポーズをとった。

「携帯ならオレ知ってるよ。まあ、ずいぶん掛けてないから変わってなければ、だけどね。」

「ホントか！なあ、悪いんだけど…。」

「解かってる。皆まで言うな、親友。オレに任せな。」

タケルは、親指を立てて拳を前に出した。

「タケル！今日は飲め！とことん飲め！内臓壊すまで飲め！俺がおこってやる！いやー、最悪嫁さんになんて説明しようかと実は頭抱

えてたんだ。」

「シユウ、お前…、急にテンション上がりやがって。白状しな！今日のメインテーマはこの事だったんだろ？」

シユウは、白い歯を見せて笑いながら、タケルのグラスに日本酒を注いだ。

シユウに酒を注ぎ返しながら、タケルは、さっきから引っかかってきた疑問を口にした。

「なあ、斎藤って5年前に、結婚したよな？だったら苗字変わってるはずなんじゃ？」

「あれ、知らなかったのか？あいつ一昨年の夏頃に離婚したらしいぜ。」

タケルはとづくに知ってると思っていた。卒業後に俺らが別れた後も、ミサキと連絡取ってたみたいだし。ああ、これはヒロミの情報だけだ。」

シユウは、やはり高校時代のクラスメートの名を口にした。

「いや、ぜんぜん知らなかった…。」

タケルは、平静を装っていたが内心激しく動揺していた。

(昔からアイツはいつも、オレの知らない間にとんでもないことをやらかす…。)

あきらめたような顔でタケルは苦笑した。

「どうかしたのか？」とシユウ。

「いや、斎藤らしいなあと思ってさ。」

「全くだ。」

二人は声をあげて笑った。親友と元彼女の不幸だと言っのに不謹慎な話だ。

3

別れ際シュウは、ホームまで見送ってくれた。

「ミサキのことだけど…。」

「大丈夫。任せとけて言っただろ？」

「いや、そうじゃなくて…。アイツ今、多分色々大変だと思うから、力になってやってくれないか。やっぱ、アイツは特別だったから…。」

「

シュウは、「もう、今の俺には出来ないことだからサ。」と続けた。

(イマノオレニハ…) タケルの胸がチクツと痛んだ。

シュウは一段トーンを上げて言った。

「タケル、お前知らないだろ？昔ミサキはホントはお前に惚れてた

んだぜ。これ、ミサキに直接聞いた話だから間違いない。  
初めて聞かされたときは、やっぱりシヨックだったぜ！」

「ええ?!」

タケルは、あまりの衝撃に軽いパニックに陥った。

「昔から思ってたけど、タケルはミサキに似てるよ。そっくりだ。  
「似てる? どういうことだ?」

「頭はいいけど、感情表現が下手だったこと。」

「タケルもアイツのこと好きだったんだろ? この俺が気づかないわけ無いじゃない。」

最終電車の到着を告げるアナウンスが、スピーカーから聞こえた。

「3人ともあの頃は若かったよな。」しみじみとシュウは言った。  
タケルには返す言葉が見つからなかった。

電車が到着して、ドアが開く。

「今日のホントのメインテーマはこれをタケルに言う事だったんだよ。じゃあ、スピーチ考えといてくれよ。かっこいいヤツ頼む。」

タケルは「ああ。」と返すのが精一杯だった。

窓越しに、笑顔で手を挙げるシュウに軽く手を挙げ返す。

『タケルはミサキに似てるよ』

帰りの電車の中で、シュウの言葉と斎藤 美咲の顔が頭の中をぐるぐる駆け巡っていた。

アパートに帰ってきてても思考の焦点が全く定まらなかった。

何から考えて良いのかすら解からなかった。

体中がぐにゃぐにゃしているような不確かな感覚で、タケルは服も着替えないままベッドに倒れ込み、そのまま深い眠りについた。

### 第3話 憂鬱

・・・細かい雨の降りしきる6月・・・  
・・・一台のバイクが、それをものともせずにひた走る・・・  
・・・原因は親友からの一本の電話・・・

「シユウ！いるか？」

「よう、タケルか？ずいぶん早かったな！。」

ノックもせずにドアを開けると、目を真っ赤に腫らし、不精髭が生え、変わり果ててしまった、あまりにも痛々しい姿の親友の姿があった。

「どうしたんだ！何があった？」

「でかい声出すなよ。ここの大家うるさいんだから。」

「そんなのどうでもいいだろうが！」

「タケル…、ミサキと別れた…。」

「えっ？」

そのまま、黙り込む親友を見て、

「斎藤のところに行つて来る！」

くるつと、身を翻したタケルに

「待てよー！！」

と、シユウは今まで聞いたことのない厳しい声で、タケルを制止し

た。

「まあ、待てよタケル。」

「でも！」

「悪かったな、わざわざ雨の中…。誰が悪いわけじゃないんだ。」

「それじゃ、わからん！」

「頼むから何も訊くなよ…。ただお前と飲みたかっただけだ。」

よほどのことがあったことは、明白だった。でなきゃ、あのいつも冷静なシユウがこんなになるはずはない。

もちろんミサキのことも気になったが、今は目の前の親友のことが最優先だ。

タケルは、ため息を一つ付いて腰をおろすと、

「朝まで飲むぞ。酒、足りるんだろうな。」

とだけ言った。

シユウはやっと少しだけ微笑むと

「やっぱり、お前を呼んでよかった。」

と言った。

・・・一度動き出した歯車は止められない・・・

・・・過ぎ去った時間は戻ってこない・・・

・・・もう二度とあの頃には戻れない・・・

一夜明けた日曜日、タケルが目覚めて時計を見ると午前10時を回っていた。

(昨日は久しぶりに飲みすぎた…。)

頭が重く、奥のほうに鉛でも混じっているのではないかと本気で思うほどの、立派な二日酔いだっただ。

熱めのシャワーを頭から浴びた後、一息ついてから、タバコに火をつけた。

タケルは昨夜のシュウの話を、出来るだけ客観的に事実関係のみを振り返ってみる。

1、シュウは(来月)結婚する。タケルは新郎友人代表のスピーチを依頼される。

2、その披露宴に新婦の友人として『斎藤美咲』が招待されている。

3、シュウのフィアンセ(松田千晶さん)はシュウと斎藤美咲がかつて恋人同士だったことをまだ知らない。

4、斎藤美咲は(おそらく)松田千晶さんのフィアンセがシュウであることをまだ知らない。

5、このままだと披露宴当日に3人鉢合わせ…。

確かに、わが身に置き換えれば、ぞつとする状況である。  
要するに、タケルに課せられた使命は、

『親友の結婚式を気まずいものにさせないようにする事』である。

(やれやれ…)

面倒なことに巻き込まれたものである。

次にタケルは、思いつく解決方法を頭の中に箇条書きにしてみた。  
この思考方法は、タケルが学生時代からよく使っていて、考え事や  
何かに迷った時に(少なくともタケルにとっては)有効であった。

a、事前に斎藤美咲に連絡を取り、式を欠席してもらおうように説  
得する。

b、松田千晶さんに事情を説明して了解をもらう。

c、事前に斎藤美咲に連絡を取り、松田千晶さんとシュウの現在  
の関係を説明し、松田千晶さんに過去のことを悟られないように行  
動してもらう。

d、双方に全て説明し、すっきり式に臨む。

大きく分けて、この4種類だろうか？

(どれを選んでも、茨の道だ…)

本来はdが一番いいことは明白だが、最も危険なギャンブルである。  
その波紋はどの程度のものになるか想像を絶するものがあるし、失  
敗すれば…考えたくもない。

bに関しては(dでもあるが)、タケルは松田千晶さんの連絡先を  
知らない為、シュウ経由の作戦になる。それでは、タケルが何の為

にこんなことを  
頼まれたか解からない。

となると、aかc。

まずaについては、実現できれば一番確実な方法であるが、齋藤美咲は面白くないだろう。

それに、『あの』齋藤美咲がおとなしく言うことを聞くとは、とても思えない。

cについては、よってたかつて主役である松田千晶さんを騙すことになる。

さらに、齋藤美咲の協力が絶対条件である。しかし、この線が最も現実的か？

(ホントに気が進まないなあ)

任せとけと言った手前あれこれ考えてはみたが、根本的な解決には程遠い。

(ええい、迷っても仕方が無い！まずは齋藤に連絡とってみるか。)

タケルは携帯電話に手を伸ばす。メモリ検索で『齋藤美咲』を読み出した。

発信ボタンを押そうとした時、昨日のシユウの言葉が脳裏をよぎった。

お前知らないだろ？昔ミサキはお前に惚れてたんだぜ。

電話を持つ手が震えている。

動揺？もう何年も前の話じゃないか！29の男がなんでこんなに動揺するんだ？

どこにでも転がっているような話じゃないか。

意を決して発信ボタンを押した。

「…只今、電波の届かないところにあるか、電源が入っていない為…」

ほっとしている自分に心底イライラした。

(いつからこんな女々しい男になった。)

でも、電話番号は変わっていないらしい。時間をおいて掛けなおそう。

物事を良い方に捉えて、気を取り直すためコーヒーメーカーにフィルターと豆を手早くセットし、水を注いで、電源を入れた。

まだ二人が付き合い始める前に、コーヒー好きのタケルに、アイがプレゼントしたものである。

入れたてのコーヒーの香りが辺りを漂い始め、タケルの心は少しだけ落ち着いた。

『ピンポーン』

突然、少々乱暴な音で玄関の呼び鈴が鳴った。

(新聞の勧誘か?)

タケルは、コーヒーカップをテーブルに置くと玄関に向かう。

ドアを開けると、そこには不機嫌そうな顔のアイが立っていた。

「砂糖とミルクはお好みでどうぞ。」

タケルはさつき作ったばかりのコーヒーをアイの分も入れた。アイはありがとうと受け取ると、ブラックのまま一口飲んだ。

「昨日は、ずいぶん飲み過ぎたみたいだね。なんかお酒くさい。」  
と、言っつてちよつとタケルを睨んだ。

「昨日から電話しても出ないわ、メールしても帰ってこないわ、心配して来ちゃったよ。」

「え？」タケルは携帯をチェックすると着信と未読メールの表示が出ていた。

「悪い、さつき起きたところだったんだ。気がつかなかった。シャワー浴びて、コーヒー入れてた。」

「それは見ればわかります。」

アイは相当ご機嫌斜めらしい。まあ無理も無いが…。

「でも、こんなに飲み過ぎるの珍しいじゃない。何かあったの？」

タケルは、この質問の場合、『昨日は誰と一緒にいたの？』と訳すのが正しいと直感的に悟った。

アイが勘の鋭い子だと言うことは、経験上良く知っていたし、ここは従順に口を割ったほうが良い。

「昨日は、高校の時の友達と会ってたんだ。そいつが来月結婚するんで、その披露宴の友人代表のスピーチを頼まれてたんだよ。」

そう言つて、招待状をアイに見せた。

見せた瞬間に『しまった!』と思つた。

…悪い予感ほど好く当たる。

案の定、先ほどの不機嫌そうな様子が一変し、彼女の猫のような瞳がキラツと嬉しそうに輝いた。

「ホントに？ 凄じじゃん！ それ絶対見たい！ 私も行っていい？」

（ああ、やっぱり…。）

アイの機嫌が良くなったのは、喜ばしいことであるが…。しかし、なんて感情の起伏が激しい子だろう。

（やれやれ、もう誰にも止められないだろうな…。）

こうなつてしまったアイを止めるのは、走っているトラックを素手で受け止めるのに等しい。

半ばあきらめていたが、藁にすぎる思いで、

「あのねえ、披露宴なんだから席の数も決まってるし、無茶は言えないよ。」

と言つと、

「じゃあ、キャンセル待ちつて言うことで。それに、やっぱり女性同伴のほうがタケル君もカッコつくじゃない。お願い！ お友達に電話して聞いてみてくれない？」

アイは、とびつきりの笑顔で、無造作にテーブルに置かれていたタケルの携帯を彼に差し出した。

「おいおい、今かよ？」

「そつ」

（やれやれ…。）

数分後、Xデーへの参加者がまた一人増えることになった。

3

（シユウの野郎！薄情なヤツだ！オレも運命共同体にしようとしてやがる。）

隣にアイがいることを分かかっていて、あえて二つ返事で快諾したシユウに怒りが収まらない。

…が、今はそれどころではない。

(しかし、こりゃ本格的に何とかしなきゃならんな…)。

タケルは、こんな時こそ心を落ち着けて考えを巡らそうと、タバコに火をつけた。

アイは嬉しくてしょうがなさそうにタケルの顔を覗き込むと、

「で、どうするの?」と訊いた。

「え?」

タケルは一瞬、アイに斎藤美咲のことをどうするのかと聞かれたのかと思つて、ドキツとしたが、すぐにスピーチの事だと思ひ至つた。

「え?あ…ああ、昨日の今日だぜ。まだ、何にも考えてないよ。」

「ふーん、つまんないなあ。」

アイはそう言ったが、その瞳は好奇心でキラキラと輝いていた。

(いっそのことアイに斎藤のことを話して意見を聞いてみるか。)

ぼんやりとそんなことを考えていると、突然

「あー!もう12時になつちゃうじゃない!今日、買い物行く約束してたのよ。」

そういえば、数日前にアイがそんな事を言っていたのを思い出した。

「それじゃ、行くね。後で電話するからからちゃんとお酒抜いておかなきゃダメだよ。」

アイはそう言つと、猫のように素早く立ち上がつて、タケルの頬に

キスをした。

アイは、笑顔で手を振ってドアの向こうに消えていった。

特大の嵐が過ぎ去った後、タケルはゆっくりと大きく伸びをした。

（くっそー。言い出すタイミングを失ってしまった…。）

新しいタバコをくわえたが、昨日からの吸い過ぎで喉が少し痛む事に気づき、それを箱に戻すと、深いため息をついた。  
さっきのアイの姿を思い浮かべる。

微かにではあるが、そのアイの姿が記憶の中の斎藤美咲と重なった。

（…最近どうも、調子が狂ってばかりだ。）

タケルは、冷めてしまったコーヒーを一気に飲み干した。

#### 第4話 予感（前編）

．．．とある大学の校門の外．．．  
．．．1台のバイクが止まっている．．．  
．．．その持ち主は、壁にもたれかかったまま空を見つめている．  
．  
．．．空は青色から橙色へ、そして紫色へと変化していく．．．  
．．．それでも彼は、黙ってその空を見つめ続ける．．．  
．．．とても哀しそうな瞳で．．．

『郷谷』ミサキは校門の前で立ち尽くした。

タケルは、着ていたジャケットと、持ってきていた予備のヘルメットを黙ってミサキに差し出す。そして少しだけ微笑んで、一言「後ろ乗れよ。」と言った。

『久しぶりだね。乗せてもらうの。』とミサキ。  
「今日はたまたま気が向いたんだ。」とタケル。

二人を乗せたバイクは、2ストエンジン特有の甲高い音を残して、夕暮れの街を駆け抜けていく。  
そして、もうすっかり月が昇った頃、懐かしの母校の前で静かに止まった。

『何も聞かないの？』  
「聞いたら素直に答えるのか？」

ミサキは静かに首を振った。

「それに、シユウのヤツにも何も聞くなと言われてるからな。」

『シユウか…。いいヤツだよなあ。ホントに…。』

「そりゃ、オレの親友だからな。類は友を呼ぶんだ。」

ミサキは静かに微笑む。

『アタシのこと責めないの？』

(なんで…)と言いかけて、タケルはその言葉を飲み込んだ。その代わりに、

「もう、戻れないのか？」と、まるで独り言のように言った。

ミサキは、その日初めてタケルの目を見た。

彼のその瞳は、綺麗で、まっすぐで、そしてとても哀しい色をして  
いた。

まるで心臓を鷲掴みにされた様に彼女の胸は痛んだ。

それでもミサキは、タケルのその瞳をまっすぐに見返して、

『後悔はしてないわ。』

と言った。

彼女を家まで送り届けた後、一人アクセルを全開で飛ばすタケルの心はバラバラになりそうだった。

悔しいのか、哀しいのか、寂しいのか・・・？

大好きな筈のこの排気音でさえ、この時ばかりは耳障りだった。

頭の中で、遠くの方にあの頃の笑い声が聞こえた。

不意に涙で一瞬視界が霞む。・・・

「しまっ・・・!!!」

次の瞬間！

大きな衝突音と共にタケルの体が・・・ゆっくりと・・・

・・・宙を舞った・・・

・・・少年から男へ・・・  
・・・少女から女へ・・・  
・・・3人にとってのその通過儀礼なのだろうか？・・・  
・・・時は、静かに流れ続ける・・・

（なーにやってんだかなあ…、アタシは。）

アイは、タケルのアパートを出た後、二つ目の曲がり角を曲がったところで、急激に足を緩めた。

一緒に買い物に行く友達との待ち合わせまでは、まだ十分に時間はあった。

（逃げてるみたい…。アタシらしくないよなあ、やっぱり…。）

もともとアイは勘が鋭い。それは自覚していたし、実際、過去、突発的に頭に飛び込んで来た予感はかなり確立で当たっていた。さつきタケルは、アイに何かを言いかけた。気が付かない振りをしたが、それは間違いないと断言できた。それだけではない。

（最近タケル君は、絶対何かを隠してる。）

そりゃあ、お互い二十数年間別々の環境で育ってきたのだから、話したくない過去や、隠し事の一つや二つはあるだろう。

（アタシには言いたくないことなんだろうな…。女かなあ）

そう考えれば考えるほど、気持ちは沈んでいった。

3年前、まだ新入社員だったアイが、最寄り駅が一緒の職場の先輩であるタカユキに連れられて地元の居酒屋に行く途中で、たまたま出会ったのがタカユキの大学時代の友人であるタケルだった。

タカユキは、久しぶりのタケルとの再会を喜び、一緒に飲もうと勧めた。

タケルは『会社の人と一緒になんだろう？邪魔しちや悪いから今度によよう。』と辞退したのだが、タカユキの持ち前の強引な誘いに引きずられるように、お店へと押し切られていったのだ。

タケルは、アイにばつが悪そうに会釈すると、タカユキに聞こえないように小声で「ごめんね。」と言った。

慣れない仕事に緊張の連続だったアイは、その様子がなんだかとてもおかしくて、「この人、いい人なんだろうな。」とリラックスしてきたのを覚えている。

カウンター席にタカユキを中心に3人並んで座り、ビールと、サワーで乾杯した。

「タケル、この子はウチの期待の新人の吉河 藍ちゃんだ。かわいいだけじゃないんだぜ。なかなか賢い！」

「タカユキ、お前は相変わらずおっさん臭いなあ、『賢い！』なんて言うか？普通。」

タケルの『賢い！』がタカユキにそっくりだったので思わずアイは吹き出した。

「あー、そこ！ごちゃごちゃうるさい。お前を紹介してやらないぞ！。」

「いいよ。自己紹介くらい出来る。」タケルはサラッとそう言うのでアイに向かって

「吉河さんか。なんか、乱入しちやって悪いね。オレはタカユキの大学の時の友達で

郷谷 武って言います。タカユキはうるさいヤツだけど、たぶん悪人じゃないから見捨てないでやって下さいね。」

と言った。

アイは、やさしい声だなと思った。

「タケル！お前、オレの後輩の前でなんてことを！」

声を荒げるタカユキに、アイは必死で笑いを堪えながら、

「吉河 藍です。先輩が極悪人じゃないことは薄々ですが感づいていますから大丈夫です。」

と言った。

タケルは一瞬びっくりしたような顔をしたが、その直後、大声で笑い出した。

「おまえらー！」

顔を赤くして怒るタカユキを挟んで、二人の笑い声が店中に響いた。3人はすっかり打ち解けた。リラックスした空気の中での談笑に一区切りがつくと、タカユキは思い出したように、

「あ、そうそう。タケル、俺たちが4年の時に1年だった『ユキ』って、覚えてるか？」

「なんだ？突然。ああ、覚えてるよ。あの凄く元気な子だろ？」と言うと、アイは

「え？やっぱりあの子元気でしたか？」と嬉しくて身を乗り出してそう言った。

タケルが、きよとんとしていると、アイは

「ユキはアタシの高校時代からの親友なんです。」と続けた。

タケルはしみじみと、「へー、世の中狭いもんだなあ。」と呟いた。タカユキに「お前も結構年寄り臭いぞ。」と、すかさず言われて少し照れ臭そうにしているタケル対して、アイはとても好感を持った。

2

「おー！感心、感心。出迎えご苦労！大儀である」

待ち合わせ時刻に遅れること15分。

アイを見つけると満面の笑みを浮かべて、ユキはどこぞの我が儘なお姫様のように偉そうな口調で言った。

「大儀であるじゃないでしょうが…。全く…。」

アイはため息をついた。

「あーら、これでもかわいい、かわいいアイを待たせちゃならんと思つて、ろくに化粧もしないで、急いで来たんだからね。」

確かにユキの今日のメイクは、眉と薄いピンクのリップだけという

簡単なものだった。

それでも、生まれつきくつきりとした二重の目とビューラーいらずの形のいいまつ毛のおかげで『それなり』以上にかわいく見えてしまふ。

「左様でございますか、姫。では、これから如何なさいましょう？」

「ウム、苦しゅうない。わらわはちと喉が渴いたぞ。茶でもどろじや？」

「はいはい、馬鹿なこと言っでないで行くわよ！」

「はい」

これが高校時代から変わらない二人の日常である。

「えー？アイ！あんた結婚するの？電撃？抜け駆け？アタシに何の相談もなしにそんな勝手がまかり通ると思ってるの？」

店内にユキの大声が響き渡り、他の客が一斉にこっちを振り返った。

「ちがーう！落ち着きなさい！」

「これが、落ち着いていられると思う！？これは大事件よ！ど、どうしよう！」

「ユキ！違うの！結婚するのはタケル君の友達！！」

「え？」とユキ。他の客がくすくすと笑っている。

「あんたは全く…、恥ずかしいじゃないの。タケル君の高校の時の友達の結婚式に私も連れてってもらおうの！」

その言葉で、ようやくユキの暴走に歯止めがかかった。

「あ、なるほどー。アイ、それを先に言いなさいよ。あーびつくりした。」

「びつくりしたのは、こつちよ。人の話をちゃんと聞きなさい!」

「ん? いや、待てよ? ってことは郷谷先輩の公式の場に同伴ってことよねえ。やっぱりあんた、当選確実ってことじゃないの!」

「だといいんだけどね...。」

とたんに表情を曇らせるアイを見て、ユキは

「はーん、ユキねえはピンと来たぞ。さては、何かあったな? ほらアイ! とつと吐いちゃいなさい。楽になるわよ。」

「下品だなあ。お店の人に怒られちゃうよ。」

「口答えしない! さあ、ネエさんに話してごらん?」

「...わかったわよ。」

アイは苦笑したが、内心この親友に心から感謝した。

「つまり...だ。いつものようにビビツときちやっただけだ。郷谷先輩が何か隠し事をしてると...。」

その鍵が先輩の昔の女関係のもつれではないかと...。まあこれは、推測ね。ターゲットを...そうね、『X』にしよう。

昨日も、先輩は高校の友達とありえないほどの深酒をしてきて、今は二日酔いの真っ最中...。ふーん、確かに私の記憶にもそんな先輩はちよつとねえ...。そんでもって、アイはその問題の結婚式に潜入する予定つと。

んー、アイ、これはファインプレーよ。

ところが、潜入が決まったとたん先輩が何かをアイに言い出しそう

になったから、…いやな予感がして逃げ出してきたってとこね。」

「なんか凄いことになってきたね。」

「他人事みたいに言わないの！はいはい、出来たよ！こんなもんかな？」

ユキはテーブルの上に自分の手帳を広げて、人間関係を図に書き記した。

ちょうど、テレビ雑誌の新作ドラマ紹介の特集で、登場人物の人間関係を示した相互関係図とそっくりな図が、瞬く間に出来上がった。確かに、それを見れば一目瞭然で、アイはさすが『理系一直線女ユキ』に感心した。

「うん、こんなもんだと思う。」

「思うじゃない！あんたのことでしょうが？今日の母さんは厳しいわよ！」

いつのまにか姉から母親に昇進してしまったユキは、まだ不服そうである。

「この図の構成要素のほとんどが、先輩の言動とあんたの勘だけだつてのがちよつと不安よね。とにかくこの『X』に迫る為の情報がぜんぜん足りないわ。」

「そんなこといっても、それはしょうがないよ。だって…」

「だって、しょうがないも関係ないの！アイ！よく聞きなさい。アタシから見ても郷谷先輩ほどの男はめったにいないんだから。あんたもそう思うでしょう？」

それが、どこぞの女にたぶらかされてるかもしれないのよ！これは、戦よ！

やらなきゃやられるのよ！」

ユキは拳を握り締めて熱弁を振るっている。

「いくさって…ユキ…あんたまた、何かに影響されてない？」

「べ、別にアタシのことはいいの！」

どうやら、またしてもアイの勘が凶星だったようである。

大方、映画館かDVDで略奪愛か戦争がテーマの映画を見たのだろう。

ユキはわざとらしく咳払いをすると、

「まあ、それはともかく、まずは、情報よ、情報！」

「だから、情報って言ってもどこから…」

「あら、いるじゃないの。あたし達より郷谷先輩と付き合いの長い人が。」

ユキはバックから携帯電話を取り出した。

「アイは、こういうところ意外と抜けてるのよねえ。まあ待つてな

さい。助っ人が1時間以内に到着するわよ。」

「助っ人？」首をひねるアイを見てユキはニヤニヤしている。

きっかり1時間後、青い顔をしたタカユキが二人の前に姿を現した。

## 第5話 予感（後編）

・・・真っ白い部屋・・・  
・・・何の飾り気もない・・・  
・・・ベッドには横たわる一人の青年の姿・・・

（寝てるみたいね…）

彼女は彼を起こさないように、そっと傍の椅子に腰掛けた。

『人の気も知らないで…』

彼女が事故の知らせを初めて聞いたのは、事故後、10日も後のことだった。

あの夜、彼は酷くショックを受けていた事は彼女にも伝わった。

彼は、自分とシユウのことを誰よりも分かってくれた。

だからこそ、もう止められないことは、彼が一番よく分かっていたはずだ。

それでも彼は…。

その直後の事故だっただけに、それを自分が知らなかった事に無性に腹が立っていた。

もちろん、彼女に余計な心配掛けないようという彼なりの配慮だった事は、彼女にも良く分かっていた。

『退院したらただじゃおかないんだから…』

そっと、彼女はつぶやく。

その瞳には涙が光っていた。

彼女は、慌ててそれを拭う。

彼は、一番自分を分かってくれる。

口先だけの言葉なんかじゃなく…。

しかし…。

彼は自分を『女』として見てくれているんだろうか…。

頭からその事が離れた事はない。

(退院したら…)

彼女は、お見舞いの花を花瓶に生けると、そっと病室を後にした。

…何かを手にしようとして…

…何かを失っていく…

…とても大きな何かを…

1

「なんだってんだ！アイ、お前まで…。」

タカユキは、肩で息をしながら二人のテーブルに割り込むように座ると、メニューも見ずにアイスコーヒーを注文した。

「さすがね 制限時間ぎりぎりセーフ！」

「ユキ、あたしたちよりも付き合いの長い人って……」

「そー！タカちゃんは大学の時、郷谷先輩と仲良かったんだから。」

ユキはタカユキをタカちゃんと呼んだ。

「そりゃそうなんだろうけど……。タカユキさん、ごめんなさい。お休みのところわざわざ……。」

と、アイは自分の会社の先輩が、自分の親友にいいようにあしらわれているのを見て慌てて言った。

「いーの！アイ。タカちゃんは私に借りがあるんだから。ねー、タカちゃん」

ユキは満面の笑みを浮かべてタカユキの顔を覗き込んだ。

「何があつたのよ……？」アイが不思議そうに訊くと、今度はタカユキが慌てて

「いや、いいんだアイ。オレはこの悪魔に取り付かれて早数年。今ではこれがオレの運命と思ってあきらめているんだから。」

「あらあら、タカちゃんいいのかなー？アタシたまに口が軽くなっちゃっからなー」

「う……、まあ、そういうことだ。」

詳しくは解からないが、タカユキはなにやらユキに弱みを握られているらしい。

（我が親友ながら恐るべし…。この子だけは敵にまわせないわね…。）

アイは、ユキのダークサイドを垣間見た気がしていた。

「タケルの昔の女関係？」

ようやく3人とも落ちついて本題に入ると、いきなりユキはタケルの過去を全て吐くようにタカユキに迫った。

「なんだあ？アイ、なんかあったのか？」

慌てるアイを見て、ユキはすかさず

「好奇心よ、好奇心。やっぱり気になるじゃない。」

と涼しい顔で助け舟を出した。

「ほら、大学の時だって、まあアタシは1年間しか知らないけど、郷谷先輩はどつちかと言うとクールって言うか、あんまり女を追っかけまわすようなイメージがないからさあ。なんか、どこかで一線を引いてるって言うか…。」

「ほー、そんな事のためにオレを呼び出したのか…。お前はどこまで人を…。」

（ひゃー、やっぱり怒ってるよ！）目でユキに訴えるアイ。

（大丈夫！任せなさい！）とユキ。

長年かけて培われた二人のアイコンタクトは完璧である。

「まあまあ、それでね、やっぱり直接本人には聞きづらいじゃない、こんなこと。だから、やっぱり郷谷先輩の『心の友』であるタカちゃんにと思っただよ。」

『心の友』という言葉にぴくっと反応するタカユキ。ユキはそれを見逃さない。

「やっぱり、あの人の性格からしてこういうことって、異性の友達にはまず話さないでしょ。かといって、同性でも話す相手は厳選すると思うのよ。『よほど』信用できる人物。二人でそんな話をしてね、『やっぱり』タカちゃんじゃないかって。」

よくもまあ、口からでまかせがすらすら出てくるものだといは心底感心した。

ここにきて、ようやくアイもユキの意図するところを理解した。要するに、タカユキの人柄、信用度をとにかく褒めちぎって、巧みに論点をすり替え、気持ちよく情報提供をして頂くという作戦のようだ。

そうこうしている間にもユキはタカユキを讃え続けた。さすがは、営業職に就いてるだけのことはある。

ユキは、最後にとっておきの台詞で、タカユキを見事に口説き落としました。

「だって、アタシが郷谷先輩なら、『間違いなく』タカちゃんを選ぶもん」

(ユキ、あなたはワルだ…。タカユキさん、ごめんなさい…。)

アイは心の中でタカユキに黙禱を捧げた。

2

「全くしょうがね　なー、お前らは…。で、タケルの過去の女かあ。」

口ではそう言いながら、タカユキの機嫌は良さそうである。

「そう　どんな人がいたの？」

「そうだなあ。まあ、アイツの場合彼女って言うより押しかけ女房みたいなパターンがほとんどっていうかな。」

一方的に言い寄られて、付きまとわれて…。アイツも悪い気はしてなかったんだろが、いつも困ってたかな…。俺にしてみりゃ、むかつく話だ。」

「ええー！そんなに人気あったの？」

アイはびっくりしたのと同時に、嬉しさ半分、嫉妬半分の複雑な気持ちだった。

「へー、それは私も初耳だわ。まあ、もてる方だろうとは思ってたけど。」

ユキも興味津々のようだ。

「いつ頃だったかな。ユキが入学する前だけど…、一度告白されて、タケルその場で断ったんだな。そしたらその子が泣くわ騒ぐわで散々なめにあつたらしい。」

今思えば、一大決心してやっと告白したその子に即答で断ったんだから、アイツも冷たいっちゃあ冷たい話なんだが…。」

「ふーん、なんとなく郷谷先輩らしくなってきたわね。」

「こら、人の彼氏を冷血漢みたいに言わないの。」

「あら、何もそんな意味じゃないわよ。ただクールなイメージに近づいてきたってことよ。」

「ふーん、でも、アタシはそんな風に思ったことないけどなあ。」

「はははは、まあ、若かったからな。タケルも。いきなりの出来事にどう対処していいか解からなかったんだらうよ。アイツ変なところで真面目だったりするからな。」

「要するに、鈍いのね。」

とユキは言い切った。

「何でいきなりそうなるのよ?」と、アイ。

「まだまだ、甘いわね。アイも。よく考えて御覧なさいな。郷谷先輩はもてるのよ、基本的に。でも、告白されるまでその気持ちに全く気がつかないから、『突然の出来事』になっちゃう訳。」

これが察しのいい人だったらそれなりに対処できるはずだと思わない?」

「まあ、そう言われてみればそうだけど…。なんかちょっと刺がない?」

それを聞いたタカユキは、ニヤニヤしている。

「なによ？タカチャン。」

「お前、1年の時タケルにバレンタイン…あげたる？」

「ちょ、ちよっと！」

「そうか、そうか。なるほどなあ。ありやお前だったのか！」

タカユキはひとり納得している。

ユキはいたずらの見つかった子供のようにあたふたしている。

「ユーキちゃん？詳しく聞かせてくれる？そのお話」

ユキは恐る恐る横目でアイを見ると、満面の笑顔をユキのすぐ傍まで近づけて瞬きもせずに凝視していた。しかも、その目だけは笑っていない。

(え、笑顔が…笑顔が…、こ、怖い…！)

「甘いのはお前だ。ユキ、観念して白状しろ。」

「ユーキちゃん、どういふことかなあ」

アイはその笑顔をまったく崩さずに、質問を重ねる。

(た、たすけてー！)

『策を弄するもの、策に溺れる』といったところだろうか？

「えーい！わかったよ！白状するわよ！すりゃいいんでしょ、すり

「や！」

やけくそ気味にユキは言った。

3

「アタシが入学した当時、郷谷先輩人気あったんだから。まあアタシも年上の男の人に対する憧れって感じだったんだけどね。」

ユキはそう前置きした。

「んで、バレンタインの時、お決まりのチョコを思い切ってあげたわけさ。前日にどうやって渡そうか、必死にシミュレーションしてさ。」

高校の時だってチョコくらいあげたことあったけど、この時の相手は大人って感じの人だし、どうすれば気に入ってもらえるかなってそりゃー考えたわよ。

人がそこまで考えて、やっと渡したってのに…。

郷谷先輩は『おお、サンキュ』だって。『おお、サンキュ。』よ！ たった一言で片付けられたのよ！」

アイは、その話を聞いて「あっ！」とユキに昔聞いた話を思い出した。

その日のユキの荒れようは凄まじいものがあった。アイはユキの家に泊り込んで、一晩中なだめ続けたのである。

「ユキ！あの話の相手…、タケル君だったんだ…。」

「そうよ！まったく。必死でアタシが渡したチヨコを思いつきり義理チヨコ扱いしおって！あの男は鈍いの！わかった？！」

「まあまあ、もう時効だ、そう怒るなよ。」とタカユキはユキをたしなめた。

アイは、ふと頭に浮かんだ疑問を口にした。

「でも、何でわかったの？タカユキさんはそれ知らなかったんですよ？タケル君は何も言わなかったんじゃないの？」

「まあ、タケルの口からは聞かなかったな。次の日タケルのうちに遊びに行ってたんだけど、いくつかチヨコがあったな。」

その中に本命っぽいのがあったから気にはなってたんだが…。」

「ふーん。」

「まあ、昔の話だからいいわよ。もう…。しかし、この子が郷谷先輩と付き合うつて聞いたときには、泣けたわよ。アタシは…。」

大げさに泣きまねをするユキ。ヨシヨシとその頭をなでながら「そんなことがあったのかー。世間は狭いね」とアイ。

すっかり機嫌の戻ったアイと、対照的に不機嫌全開のユキを見てタカユキは、

（なんだかなあ、この凸凹コンビは…。）とあきれながらも

（しかし、あのことを知られたらオレに明日の朝日は昇らないな…。後でタケルに口止めしとかねば…。）

実は、その年にひとつもチヨコを貰えなかったタカユキは、そのは

らいせに、タケルの部屋にあつたチョコを全部食べてしまったのだ。そのことを二人の前で口にしなかった、自分の判断の賢明さを密かに讃えるタカユキだった。

「あー、もう話脱線しちゃったじゃないの。」

もうこれ以上自分の過去を掘り下げられたくないユキは、本線に戻すべく背筋をピンと伸ばして、座りなおした。

「何の話だったっけ？」とタカユキ。

（この男は…。今に見てなさい！）と思いながらもユキはそんな様子は微塵も見せず尋ねた。

「郷谷先輩の話よ。例えばもつと古い話、高校の頃の話とか。何か聞いたことない？」

『高校の頃』と聞いて、アイは思わず身構えた。

「うーん、そうだなあ。さっきお前も言ってたけど、アイツあんまりそういうのしゃべりたがらないからなあ。」

タカユキは、腕組みをして視線を宙に送った。

「タカユキさんは、タケル君の高校の頃の友達とかは誰も知らないの？」

アイもようやく当初の目的を思い出したのか、真剣な目になった。

「高校の友達かあ。…あ、そういえばタケルが入院してる時に、病

院で何人が会ったなあ。」

「入院?!」と二人の声が見事に重なる。

「ん? 知らなかったのか? 俺達が2年の時にタケルのヤツ、バイクでかなり派手にやっちまったんだ。二ヶ月近く入院してたんだぜ。」

その頃オレもちよいちよい見舞いに行っただけけど、その時に高校か中学かの友達と病院でたまに会ったよ。」

「うー、タケル君、今までそんなこと一回も話した事ない…。」

アイは、そんな大事件を自分が何も知らなかった事に、少なからずシヨックを受けたようだ。

「おい、アイ。しょげるな、しょげるな。大方タケルのことだからお前に話したら、バイク乗るの反対されると思っただろうよ。」

「まあ、それも先輩らしいわねえ。カワイイところあるじゃない。」

と、また話の脱線しそうな気配にユキもすかさずフォローにまわった。

「反対してやめてくれるなら、とっくにしてるよ。」

と、アイはあきらめ顔でため息をついた。

なんとか、話の脱線は食い止められそうだ。すかさず、ユキは

「その中に女の子はいた?」と聞いた。

「まあ、何人がいたな。普通の友達って感じだったが。ギブスに落書きしてタケルに怒られてた。」

友達関係よりもオレとしては看護師さんの顔見るのが楽しみだったな。」

「もう! そんなこと関係ないでしょうが、仕事なんだから…。」

「いや、関係あるぞ。よく言うじゃないか。看護師さんと患者が

深夜の病院で…。」

「この親父め！趣旨が変わってるでしょうが！」

言い終わる前に、ユキに一喝され、今度はタカユキが…しよげた。

(ふーむ、これ以上の情報収集は難しいかもねえ…)

ユキがそろそろ話を切り上げようかと思った頃…、

「あ、そういえば入院中に、一人で見舞いに来てる子がいたなあ。」

二人の表情がとたんに強張った。

「ほら、お見舞いって言うと、みんなでわいわいやってきたりする  
だろ？でもその子は一人に来てた。凄いきれいな子だったんだが、  
悲しそうな顔してたから、オレも声なんか掛けられなかったなあ。」

アイの心に波が立つのを感じた。これは、いつも何かピンと来る時  
の前兆である。

(ユキ…ひよっとして…)とアイ。

(ついに、辿り着いたかもね!)とユキ。

当然、二人のアイコンタクトである。

「ちょっと興味あるわねえ、その子。何か知ってることある？」

おだやかなポーカーフェイスでユキはタカユキに訊いた。

「いや、何にも…。タケルに聞いても『友達だ』としか言わなか

ったしな。ただ、きれいな子だったなあ。」

遠くを見て目を細めるタカユキを、眺めながら、

(肝心な事は何も知らないじゃないの！この役立たず！)

ユキは内心ハラワタ煮えくり返っていたが、やはり表情には出さずに

「今日はいろいろ聞けて楽しかったわ。ありがと！タカちゃん。」

と、にこやかに言った。

付き合いの長いアイは、その笑顔に戦慄を覚えたが、当のタカユキは、

「まあ、あいつの事ならオレに何でも聞きなさい」

…幸いにも全く気がつかなかったようである。

その数日前…、アイたちのいる喫茶店から、約100キロ離れたU県Y市では…。

「まさかね…。」

彼女の右手には、一通の往復はがきがあった。

差出人の友人の名の横には、『坂本修二』とあった。

「千晶が知ってるはずないしね。同姓同名なんだろうな。」

一応そう納得したが、この一週間、『彼ら』との思い出があふれていた。

( シュウ、今どうしてるのかな？ )

そして、『アイツ』のことが頭から離れなかった。

( このままじゃあ、私は前に進めない…。 )

彼女は深いため息を吐いた。

## 第6話 手紙（前編）

・・・桜のつぼみも膨らみ始めた頃・・・  
・・・スーツや袴にそれぞれ身を包んだ若者たち・・・  
・・・今日は4年間の大学生活の最後の日・・・

「あー、終わっちまったなあ。」

スーツのポケットに両手を突っ込んだまま、タカユキは呟いた。

「オレは4月からちゃんとやっていけるのかねー？」

『そんなもんオレに聞くな。』タケルは苦笑しながら答えた。

卒業式も終えて、あとは卒業証書を受け取るだけの二人は、それまでの時間を

4年間、いつも溜まり場だった校舎前の広場で過ごしていた。

「あー、いたいた」

「よう、ユキか」

「おう！ユキだ」

『相変わらず元気だなあ。』

1年生のユキは何かとこの二人と行動する事が多かった。

その二人の卒業の日、学校が休みだったユキは二人に会いきていた。

「おめでとーございます！」

「オレ達がいなくなると寂しくなるだろ？」

「まあそりゃそうだけど、おめでたい事ですからねー。それに、これからもちよくちよく遊んでもらうつもりですから。」

『ユキちゃんらしいね。』

「はい、自分らしく生きるのがモットーなんです」

『ふむ、自分らしく…か』

タケルは呟く。

「郷谷先輩、卒業式だからってクールに決めようってさうは行きませんよ。さあ、今から遊びに行きましょう。その為にわざわざ来たんだから。」

「おいおい、まだ卒業証書もらってないんだから…。もうちょっと待ってる。」

「えー、タカユキ先輩『も』卒業できるんですかー？」

「なんだと、この小娘が！」

「あー、ひどい！今のは暴言ですよ！暴言！」

「どつちがだ！タケルもなんか言ってるやれ！」

『え？お前、ホントに卒業する気なの？』

「てめえ…。」

（なんだかんだいってもいい仲間に恵まれたよな…）  
まだ慣れないネクタイを気にしながらぼんやりと考える。  
タケルは、なおも言い合いを続ける二人を眺めながら

（なんかあの頃のオレたちみたいだな…）

と懐かしく思った。

…いよいよ学生から社会人へ…

…自分はあの頃からどれほど成長しているんだろう？…

・・・今までに経験した数々の出会いと別れ・・・  
・・・その数だけの思いを胸にそれぞれの道を自分の足で歩き出す・・・

1

その日、斉藤 美咲の勤める歯科医院は午前中だけの診療日であったが、平日に通院できないサラリーマンやOL達の予約でいっぱいであった為、いつも通り皆忙しく動き回っていた。

「・・・では次回のご予約は、来週の金曜日でよろしいね。」

「次回いらっしゃる時には、保険証もお持ちくださいね。」

「どうぞ、お大事に。」

日曜日という事もあって、事務担当者が休みを取っていたため、普段はやらない受付業務も、出勤しているミサキら歯科衛生士たちが交代で行っていた。

その日最後の患者を笑顔で見送ると、ミサキはふーっとため息をついた。

ミサキはこの歯科衛生士という仕事は自分に向いていると思う。

医療現場である以上、その責任の重さも自覚できたし、やりがいも

ある。

なにより、大抵の人が無条件で嫌っている歯科医院の特有の薬品において、雰囲気が子供の頃から嫌いではなかった。

ミサキが幼い頃に母親に連れられて通っていた歯医者さんのお姉さんたちは、とてもやさしくて、一緒に遊んでくれて、彼女は歯医者に行く事が楽しみだった。

そんなミサキを見て母親は、

「ちつとも怖がらないのねえ？」

と首をひねっていた事をうっすらと覚えている。

手早く器具の消毒や、診療室の片付け清掃、次の日の準備作業を終えて更衣室で着替えをしていると、隣で着替えていた後輩が

「ミサキさん、この後お茶して行きませんか？」とたずねた。

「ごめん。ちょっと用事あってサ。また今度ね。」

すると、後輩は、キラッと目を輝かせて、

「男っスね？」と親指を立てて言った。

ミサキは苦笑した。

「違うわよ。家の用事よ。全く若いのに親父くさいわねー。」

「あー、ひどい！でも、ミサキさん結構淡泊ですよ。あんな素敵な彼氏いるのに。ひよっとして…実は…まさか…？」と胸を隠す仕草をした。

「あーら じゃあこれから一緒にうちに遊びに来る？」

「ちょ、ちょっと、ありがも……」

「……前言撤回。出入り禁止。」

「冗談ですって!」

「……やれやれだわ。」

そう言った瞬間、ミサキはハツとした。

「……?どうかしたんですか?」

「ううん、なんでもないよ。さーて、帰ろ!」

「あー、待って下さいよー!」

後輩と駅で別れた後、ミサキはひとりホームで電車を待っていた。

(やれやれ……か。)

かつて、彼女のある友人が口癖のように言っていた台詞を思い浮かべ一人微笑んだ。

先日、友人の松田千晶から、結婚披露宴の招待状が届いた。

それ自体はおめでたい事である。本当なら、すぐにでもお祝いの電話をしたところなのだが、彼女はそれがなかなか出来ずにいた。

『坂本 修二』

招待状に記されていた千晶の夫となる男の名前である。

ミサキは高校時代に『坂本 修二』と付き合っていた。

同一人物なのかは分からない。が、もう10年も前の話である。

例えそうであったとしても、懐かしい思い出話として片付けられる事なのかもしれない。

しかし・・・

2

ミサキは、家に帰って、布団を干して、洗濯物も干し、部屋の掃除を終えて遅めの昼食を取った。

食後のコーヒーを飲みながら、千晶からの招待状をぼんやりと眺めていると、

携帯電話が鳴った。

『仕事終わった？』

いつも聞きなれた声。祐二からだった。

彼とは去年の暮れから同棲している。

「うん、今日のお帰りは？」

『遅くなりそうだ。待ってないで先に寝てていいからね。』

「了解。」

雑誌編集の仕事をしている彼に日曜も祭日も関係あるはずもなく、毎日夜遅くまで仕事をしていた。

生活時間帯はまちまちで、ミサキとすれ違いになる事も多かったが、

ミサキは最初から分かっていた事だったし、大して気にもしていなかった。

『今度休み取れたら、どっか遊びに行こう。』

ちよつと申し訳なさそうに祐二は言った。

この一年間で何度その台詞を聞いただろう？

「気にしないで。仕事でしょ？」

笑いながらミサキは言った。自分がこの台詞を言ったのも何度目だろう？

少し話をした後、電話を切った。

祐二は、とても誠実で優しくかった。いつも会えない事に少しも寂しさを感じないといえは嘘なのかもしれない。

しかし、ミサキにとっては、このくらいの距離感がちょうど良かった。

短大卒業後、ミサキは数人の男性と交際し、24歳の時に結婚した。24歳という年齢が早いか遅いかは分からない。

しかし、結果として3年後に離婚という結末を迎える。

失敗だったと片付けてしまうのは簡単な事だったが、彼女は、一連の出来事の中で、実に多くのことを学んだと思っている。

以前のミサキは、恋人とはできるだけ一緒にいたいと思っていたし、よく、予定のすれ違いが原因で喧嘩もした。

『恋愛と結婚は違う』

よく耳にする台詞であるが、彼女は一緒に思い出を共有する事と、生活を共にする事は、別の次元にある話であることを実感していた。

生まれも育ちも違う、全く別の人格の2人の人間がずっと一緒に生活していくのだ。  
当然、生活習慣や考え方の食い違いが出てくる。その上、逃げ場もない。

『結婚生活はいかに妥協するかだ』

この言葉も正しいと思う。

24歳当時のミサキの結婚に対する認識は、今思えば相当に甘いものだったのだろう。

もっとも、その結婚には『理由』があつたのだが…。

かつての夫はミサキを愛してくれていたし、彼の両親も何かと彼女に良くしてくれた。

しかし、彼女にとつての結婚生活は、決して楽しいものではなかった。

離婚するに当たつても周囲の冷やかな目や、陰口がささやかれていた事も知っていた。

ミサキはこの離婚について後悔はしていない。

それらは、今の自分を作り上げている、決して欠くことのできない要素だと

思っているからだ。

ミサキは、それらによって女として、人として強くなれた。

そう、彼女は強くなった。前よりもずっと…。

強くならなければならなかったのだ。

ミサキは、新しいコーヒーを入れると、もう一度招待状に目を落とした。

祐二には、このことをまだ話していない。  
変なプレッシャーを掛けているように思われるのもいやだったし、なりよりミサキ自身が、まだ再婚を望んでいなかったからだ。

（千晶は、あの『シユウ』と結婚するのかな？）

もしそうだったら、自分が披露宴に行っても良いものなのだろうか？

（アイツも来るんだろうな…）

アイツとは、自分とシユウといつも一緒に過ごしていた『郷谷 武』<sup>タケル</sup>の事である。

3人は高校時代、いつも一緒だった。

休み時間や放課後は、大抵学校の廊下で過ごしていた。

下らない話や一緒に遊びに行った思い出は、今でも昨日のこのように鮮明に思い出せる。

タケルはいつもまっすぐで彼のその瞳には嘘はなかった。

彼女にとって、いつも一番の理解者であり、彼女は、密かに彼に惹かれていた。

もちろん当時はシユウと付き合っていたし、シユウの事はとても好きだった。

その気持ちに嘘はなかった。

だから、表面上は必死に平静を装っていた。

タケルもそういうことには鈍かったので全く気づいていないようだった。

しかし、月日はタケルへの気持ちをどんどん大きくしていき、彼女の精神バランスは、その均衡を保つためにいつも悲鳴を上げていた。20歳の時に、ついにシユウとの別れを決意する。シユウに別れを切り出した時、

シユウは、静かにその理由を尋ねた。

ミサキは、その理由を正直に話した。それらしい話でごまかそうかとも考えたが、

この2人に対してだけは、正直でいたかった。

シユウは黙ってその話を聴いていた。

そして「・・・うすうすは気づいてたよ。」と言った。

いつも3人で過ごした、掛け替えのないあの素敵な時間は…、その瞬間終わりを告げた。

タケルとはその後も交流があったが、結局二人は恋人になる事はなかった。

タケルもシユウに対して遠慮があったのかもしれないし、単にミサキを恋愛対象として見る事ができなかったのかもしれない。

ミサキは自分の気持ちを打ち明けようとした。

しかし、あれほどの一大決心をしてシユウと分かれたのに、タケルに対して、

タケルという支えをなくしてしまうことに対して、臆病になってしまっていた。

シユウとの別れの後、ようやくタケルと笑って話せるようになって、彼女にはそれがただ嬉しかった。

前と変わらず、自分に接してくれる事が嬉しかった。

少なくとも、タケルは自分を拒絶したりはしないと確信があった。

しかし、後一步を踏み出す事が結局できなかつた。

『少し時間を置こう』

彼女は、そう決めて逃げてしまった。

自分の良き理解者でいてくれる今の状況を壊したくなかつた。

タケルと友達付き合い合いをしながら、別の男と付き合い合っていたりもした。

だが、当然長続きするわけもない。タケルは

『なんだあ、また別れたのか？しょうがねえヤツだ』

と、苦笑していた。

当然タケルに彼女ができた時期もある。その時には彼女は身を切られるような思いだったが、その付き合いは自分より浅いものだと信じた。

自分勝手な話であるが…。

その後、ミサキは自分の弱さを痛感させられる事になる。

タケルとは、度々飲みに行ったのだが、ある時こんな事を訊いた事がある。

「彼女いるくせに私と二人で飲んでていいの？」

タケルは、

『人の事いえるのか？まあ、斉藤は治外法権だよ。』と答えた。

彼女には、どちらの意味でそう言ったのか分からなかつた。

「なによ？女扱いしてないでしょ。」

彼女は、タケルの真意が聞きたくて高鳴る鼓動を悟られないように  
平静を装って尋ねた。

この時のタケルの言葉を、彼女は、一字一句違うことなく記憶して  
いる。

『女扱いねえ。斉藤は斉藤だからなあ。まあ、女としてみてるかっ  
て訊かれたら…、見てるんだろうな。多分。』

正直、斉藤はいい女だと思うよ。

100パーセント下心がないのか？って訊かれたら、0とは言い切  
れないね。

どうしたって混じるよ、やっぱり…。

とにかく、斉藤は斉藤なんだよ。オレにとっては。

まあ、黙って喜んでなさい。【特別だ】って言ってるんだから。』

親友としてなのか、恋愛対象としてなのかは、結局判断がつかなか  
ったが、タケルの性格上、気軽にそんな台詞を口にする事はないこ  
とだけは分かっていた。

だから、ミサキにはその言葉が何よりうれしかった。

タケルは照れたような顔をしていた。

漠然とであるが、この先、チャンスは必ず来ると信じた。

その時こそ絶対に逃げないと心に決めた。

『斉藤こそオレを男扱いしてるのかあ？』

「さーねえ、郷谷は郷谷だから。」

『やれやれ。』

この時以来、郷谷 武とは会っていない。

その数カ月後、彼女は体調に異変を感じていた。  
妊娠と診断された。

その時付き合っていた彼は、  
「結婚しよう。」

と言った。

4

妊娠したミサキは、その現実を認める事ができずにいた。

（嘘だ。…何かの間違いに決まってる…。）

全てが音を立てて崩れていくような絶望感で部屋に一人こもり、ろくに食事もとらず、本当の気持ちを誰にも言えないままベッドの中でうずくまって泣いた。

その寂しさから、心の弱さから他の男と付き合っていた自分の考えの浅はかさ、軽薄さを呪った。

そんな事を知らない両家の両親や、彼はミサキの負担を少しでも軽くしたいと考え、式の日取り決めや準備を、お腹が、まだ大きくならないうちにと急ピッチに進めていた。

それらの報告を聞いたびに、ミサキの心は引き裂かれるようだった。そして、『入籍だけでも先に済ませておいたほうがよい』という彼らの意見に押し切られるように婚姻届に彼女の判を押しした。

この頃には、もう彼女に抵抗するだけの気力は残されていなかった。

ようやく彼女が精神的に落ち着きを取り戻しかけた頃、彼女は、タケルに手紙を書いた。

思うように書けず、何度も何度も書き直した。

途中、涙で視界がにじんだが、それでも机に向かい書き直し続けた。

(今更、アイツになんて言えばいいんだろう…。)

(言える訳がない…。)

結局、結婚すること、新しい連絡先を簡単に知らせるだけのそつけない手紙になった。

久しぶりに気分転換に散歩に行くと、両親に嘘をついて外に出た。

近所の郵便ポスト前に着いた時、手紙を持った彼女の手は震えていた。

(これで、全てが終わる…。)

涙が出てきた。

3人で過ごしたあの頃から、たった数年しか経っていないのに…。

つい、数ヶ月前タケルとあんなに普通に笑っていたのに…。

彼女は、その手紙をゆっくりとポストに入れた。

『コトツ』と言う音が聞えた時から、放心状態でその場を一步も動く事ができなかった。

どれだけそうしていたらだろうか？

ようやく重い足取りで家路に着こうと足を踏み出した瞬間、激しい吐き気と眩暈に襲われた。

血の気が引いて、冷や汗が噴き出し、目の前が真っ白になった。

下腹部に激しい痛みを感じ、思わずその場に蹲るように倒れた。

(・・・郷谷・・・)

薄れていく意識の中で、思い浮かんだ彼の顔はあの頃のように笑っていた…。

『稽留流産』・・・病院で医師はそう説明した。

これからの体のケアについての説明がなされていたが、ミサキの耳にはもう、何も届いてはいなかった。

## 第7話 手紙（後編）

・・・テーブルの上にはウイスキーのグラス・・・  
・・・椅子の背もたれに体を預けて男は天井を見上げる・・・  
・・・左手には一通の手紙・・・  
・・・『アイツ』からの手紙・・・

（…何だっけ言うんだ？）

何かの冗談だと思った。

正に『寝耳に水』といった言葉がぴったりだった。

その手紙の差出人は、ミサキだった。

【突然のお手紙で、驚いた事と思います。私こと斉藤美咲は今月  
日に入籍しました。

それにつきまして、新しい住所、連絡先は・・・】

（入籍だと…？）

彼は、グラスを煽った。

数ヶ月前、彼女と会った時には、そんなそぶりは一切感じられな  
かった。

一瞬にして、彼女が物凄く遠くに行ってしまったような、今までに  
感じた事のない喪失感だった。

それ以上に、自分がその事を全く知らされていなかったことが悲し  
かった。

（何かあったんだろうか…？）

何かあったも何も、あったから、この手紙が来たんだろう。  
ひどく惨めな気持ちだった。

自分ひとり置いてけぼりにされたような……。  
高校時代からの彼女との記憶が津波のように延々と押し寄せてくる。  
彼女が自分にとって、どれだけ大きな存在だったかを痛感した。

(オレは今まで、何をしていた?……)

(どうしようもない大馬鹿野郎だ……)

ウィスキーをグラスに半分ほど注ぐと、ストレートのまま飲み干した。

(…要するに、オレはこうならなきゃ自分の事も分からない餓鬼だったってわけか。)

全てが遅すぎた。

ミサキが好きだった。

誰よりも……。

……もしも、あの日に戻れたら……  
……決して叶わない願い……  
……時はそれをあざ笑うかのように……  
……淀みなく流れ続ける……

ミサキは、まさに絶望のどん底にいた。  
何の罪もない新しい命が自分の身勝手さのせいで失われた…。

（私が殺した…。）

彼女の夫は、何とかミサキを励まそうとしてくれたが、かえってそれが、ミサキを落ち込ませた。  
表面上は落ち着いた生活に戻ったかに見えたが、ミサキから笑顔が消えていた。

こんな時に、いつも傍にいてくれたあの二人はもういない。  
その冷たい事実にはミサキは自殺まで考えたがそこまでの勇気もない。  
無気力に、淡々と日課を消化するだけの日々が続いていたある日、  
彼女宛に一通の手紙が届いた。

『T・SATOYA』

おそらく、ミサキの新しい環境に配慮したのだろう。  
差出人にはローマ字でそう記されていた。

彼女は、目を疑った。

どれほど、心の中でこの名を呼んでいただろうか？  
彼女は、その手紙を胸に抱えて大きく深呼吸をした。  
心臓が早鐘のように鳴っている。

一人、部屋に籠ると封筒の中の手紙を一緒に切ってしまったくないように、逸る心と震える手を必死に押さえつけながら、丁寧に、丁寧にその封を開けた。

『 Dear Misaki Saitou

しばらくです。元気にしてますか？

まさか、オレがキミに年賀状以外に手紙を送るなんて事になるとは思わなかったので、自分自身かなり混乱しています。

結婚されたそうで、あまりに突然のニュースにどうリアクションしたら良いのか分からず、返事が遅れてしまいました。

【オメデトウ】って言うべきなんでしょうね。

オレ達も24歳になったんだから、こんな話があっても、ちっともおかしくはないんだけど、オレ自身がまだまだ先の話だと、勝手に思い込んでいただけなのかもしれません。

何か、また置いてきぼりにされてしまったような、正直、淋しい気持ちがあります。

【また】って言うのは、キミがオレより一足先に社会に出た時のこと。

就職してしばらく経った頃のキミは、まだ学生だったオレから見ても、大人に見えてカッコ良かった。

自分の知らない世界にいるキミを見て焦ったものです。

なんだか、置いて行かれてしまったような気がして……。

思えば、高校のころから、ずっとそんな気持ちでいたのかもしれない。

いつも、自分の一歩先にキミを見ていたような気がします。

最近やっと追いついてきたかなって思っていた矢先の知らせだったので、うまくいえないけど、やっぱり寂しく思います。

ひとつだけ心配している事。

ここに至るまでに、オレ自身何も知らされていなかったことです。

縁起でもない事だけど、何かあったんじゃないか？

もう二度と会えないんじゃないか？

なんて考えたりもしました。

万が一、何か困っている事があつたら、いつでも言ってく下さい。  
できる事なら、いくらでも力になるから。もちろん、そうじゃない  
ことを祈ってますが……。

きつと、いろいろ忙しくて大変なんだろうね。

オレはその辺の事は疎いから、よく分からないけど……。

落ち着いたら連絡ください。

いつでも構わないから連絡ください。

絶対会いましょう。

話したい事や、訊きたい事が山のようにあるからね。

最後に……これからもキミの事は【斉藤】って呼ばせてもらいま  
す。

この間も言ったけど、斉藤は斉藤だからね。

いつ、どこにいても、斉藤が斉藤らしくいてくれることを願ってま  
す。

! I'm always on your side

r Friend

FROM YOU

Takeru Satoya

松田千晶からの招待状をテーブルに置くと、ミサキはクローゼットのほうを振り返った。

あの手紙は、その奥に今でも大切に仕舞われている。

I'm always on your side

！

（『いつだって味方だ』・・・か。）

彼には、ミサキがどんな状況にいたのか分からなかっただろう。いきなり、連絡を絶ってしまった自分をどう思ったのだろうか？ ましてや、事前に何の話もなしに『入籍する』とだけ伝えて…。さぞ混乱したに違いない。

そんな状況の中、自分に送ってくれたメッセージ。とても彼らしい言葉だと思った。

そして、その言葉にどれほど励まされただろうか。

どん底にいたミサキを引っ張りあげてくれた魔法の言葉。今までに数え切れないほど読み返した。

『絶対会いましょう・・・』

まだ、それは果たされていない。

今更、会ってどうなると言うのか。

ミサキには今の生活がある。恋人がいる。

彼にも同様に今の暮らしがあるのだろう。

しかし、彼女には千晶からの招待状が何かの導きに思えてならなかった。

自分自身の心のわだかまりに今こそ決着をつけなければならない。

彼女はそう強く思った。

ミサキは、大きく深呼吸すると携帯電話を手に取った。

(まだ、番号変わってないかな?)

メモリ検索で『郷谷タケル』を読み出した。

3

アイが部屋を出た後、郷谷タケルはベッドに寝転がって昔の事を思い出していた。

斉藤ミサキのことを思い出していた。

彼女に振り回され続けた高校時代。

(悪くなかったな……。)

その頃のことを思い出すと自然と顔がほころぶ。

3人で会う事がなくなったら後も自分にとってはとても大切な存在だった。

ある時、突然結婚してしまったミサキ。

その時思い知らされた彼女への想い……。

そのまま、今日まで会っていない。どうにも、腑におちない点もあった。

月日は、彼女の記憶すらだんだん薄めていってしまふ。

決して忘れてしまったわけではない。

しかし、心の中の『現在進行形』のスペースから少しずつ『昔の思い出』のスペースへ移行していつてしまった。

(今、アイツはどうしているんだろうか?)

この間のシュウの話では、一昨年に離婚したと言っ。

力になってやってくれ

シュウはタケルにそう言った。

(今のオレに何ができる……。)

(アイツは、今オレを必要としているのか……?)

彼女には、彼女の今の暮らしがあるだろう。

もう何年も、連絡すら絶ってしまっている自分に何ができるだろう? 自分にも今の生活がある。

タケルは、最後にミサキと会った時のことを思い出す。

いつものように笑っていた彼女。

数カ月後に突然届いた彼女からの手紙。

その時、タケルは初めて彼女に手紙を書いた。

直接会って、真実を見極めたかったのだがそれは叶わなかった。

その手紙の最後に書いた言葉。

I'm always on your side  
!

その時の自分の精一杯の気持ち、そして自分自身の覚悟だった。

彼女を案ずる気持ち…、彼女を大切に思う気持ち…

手の届かなかった彼女への。

その時の言葉、その時の自分の想い。それだけは、何があっても裏切れないと思う。

(何ができるか?…。そんなモン知るか!)

彼はガバツつとベッドから起き上がった。

(もう一度、アイツには会わなきゃならない。)

タケルは、テーブルの上の携帯電話を手に取った。

ミサキの手にしていた携帯電話がいきなり鳴り出した。彼女は、息が止まるほどびっくりして思わず電話を床に落としてしまった。

(誰よ！全く、こんな時に…。)

そう思いながら、電話を拾ってディスプレイを見た。

(………！)

『郷谷 タケル』 そう表示されていた。

彼女はパニックに陥った。

電話は鳴り続けている。

彼女はもう一度深呼吸すると、ゆっくりと通話ボタンを押した。

「もしもし………」

『……郷谷ですけど。』

5年ぶりに聞いたその声。一瞬頭の中が真っ白になった。

『……もしもし？』

『斉藤？……』

「さと……や？」

『よかった。番号変わってなかったな。』

彼はほっとしたように笑った。

『久しぶりだな。元気か？』

「・・・うん。元気だよ。」

『ホントに久しぶりだよなあ。』

彼はしみじみと言った。

ミサキは言葉が出てこなかった。

『・・・どうした？大丈夫か？』

「うん・・・ごめん。ずっと連絡しないで・・・。」

『ホントに待ちくたびれたぞ。まあいいさ、やっと声聞けたしな。』

「・・・うん。」

『あのさあ、聞いたか？シユウの事。』

ミサキは、はっとした。タケルからの電話の衝撃にすっかり忘れていたが、やっぱり、千晶の相手はやはりあのシユウだったのだ。

「やっぱりそうだったんだ。私は千晶のほうから招待状もらった。」

『来れるのか？』

「まだ返事してないんだ。」

『どうして？』

「うーん、私が行ってもいいのかなあ。」

『いいに決まってるだろ。』

「そうなのかなあ・・・。」

『らしくないなあ。』

ようやく、ミサキも少し落ち着いて話せるようになってきた。

落ち着いてきたら、急に自分が式に行く事が躊躇われた。

本当は誰よりも自分が行きたいのだが・・・。

「らしくないかあ。そうかもね……」

「……」

「郷谷は行くの？」

「ああ、友人代表のスピーチもするぞ。」

「へー。まあ当然よねえ。」

「当然だ。」

電話の向こうでタケルは笑った。

『でも、引き受けたのはいいけど、何話そうかまだ何にも考えてないんだ。』

「私も観たいなあ。それ。」

『それって……、オレはさらし者か。』

ミサキも笑った。前と変わらない口調で話すタケルの声が嬉しかった。

『……あのさあ、式の前に一度会わないか？』

「え？……」

ミサキは躊躇した。あんなに再会を望んでいたはずなのに……。

『あれから5年だぜ。話したい事やら、聞きたいことやら山ほどあるんだけど。』

「そうね。私もたくさんあるよ。」

ミサキはふと思いついたことを訊いた。

「郷谷は、あれっきりバイク止めちゃったんだっけ？」

『……そのつもりだったんだけどね。あんな面白いモン止められ

るわけないだろ？復活したよ。』

「やっぱりね。そんな事だろうと思ったよ。でも、もう無茶はやめてよ。」

『もう、そんな若くもないよ。』

「あら、私も同じ年なんですけど。」

『大変失礼しました。』

二人は笑った。ぎこちなさの中に少しずつ昔の感覚が蘇ってくる。その懐かしさと、心地良さ。

その時、ミサキはある事を思いついた。そして決心した。

「よし、会おう！郷谷はまだN市にいるの？」

『ああ、前と変わってないよ。』

二人は、二週間後の土曜日にそれぞれ住んでいる場所のちょうど中間地点の駅前で待ち合わせる事にした。

「ねえ郷谷、バイクで来てよ。」

『別にいいけど……。』

「それじゃあ、決まりね。」

その夜、ミサキはまだ信じられないような気持ちだった。

もう二度と会えないと思っていた郷谷タケルとの再会の約束に胸が躍った。

(アイツをびっくりらせてやるぞ。)

そして彼女は、『それ』を見て目を丸くするタケルを想像して微笑んだ。

彼女は、久しぶりに、本当に久しぶりに嬉しさと安心感の入り混じ

った気持ちで、安らかな眠りについた。

## 第8話 再会2

・・・大学を卒業して三度目の春・・・  
・・・二人の男がカウンターに並んで酒を酌み交わす・・・  
・・・スーツ姿も、だいぶ様になってきて・・・  
・・・一人が唐突にその話題を変える・・・

『復活しようかと思つてさ・・・』

「なんだよ、突然。何をだ？」

タカユキは、隣でグラスを手に弄んでいるタケルを見る。

『バイク。』

「なにー？懲りないねー、お前も。死掛けたくせに。」

『ほっとけ。どうしてもまた乗りたくなつたんだよ。』

「まあ、別に止めはしねーけどさあ。車はどうするんだよ？」

『先週、売った。』

タカユキはびっくりしてタケルをまじまじと眺める。

『さすがにレプリカ（ ）はもう止めとくけどね。』

（タケルのヤツ・・・、何かあつたな・・・？）

「ふーん、まあいいさ。とりあえず飲め。」

タカユキはタケルのグラスにビールを注ぐ。

『俺たちも24かあ。』

「ああ、24だ。」

『・・・早過ぎるよ。』

グラスを見つめたまま、タケルはポツリと呟く。

「確かにあつという間だったなあ。」

『・・・そうじゃねえよ。』

「何が？」

『・・・別に・・・なんでもねえ。』

(…絶対、何かあったな。)

言うべき時は何も訊かなくても言う。

そつでなければ何を聞いても言わない。

大学の頃からの付き合いで、そんな彼の性格をよく知っているタケルは、あえて何も訊かないことにした。

「…オレもバイク取ろうかなあ。」

その静かな酒宴は深夜まで続いた。

・・・今まで考えた事すらなかった・・・  
・・・突然、突きつけられる現実・・・  
・・・『自分たちはもう大人なんだ』・・・  
・・・嫌でもそれを思い知らされる瞬間がある・・・

( ) レプリカ…レーサーレプリカ。レーシングバイクの市販車版。

乗り心地よりも軽さ、スピード、旋回性能重視。

乗りこなすのに気合とかなりの技術が必要。

1

「お疲れ様でしたー。お先に失礼します。」

二週間後の金曜日、アイが、夜7時に一日の仕事を終えて会社を出ようとした時、不意に後ろから声を掛けられた。

「よお、お疲れさん。今日は残業してたのか。もう出られるのか？  
じゃあ、たまには飯でも食べてかないか？」

振り返ると、そこにはタカユキの姿があった。

「驕りなら喜んで」

アイはにっこり笑ってそう言った。

「・・・お前どんどんユキに感化されてないか？身を滅ぼすぞ。」

このまま行ったら『ユキ2号』が誕生しそうな気配に不安を隠しきれないタカユキだった。

「おお！まだ、この店あるじゃん。ここにしよう。」

二人は、少し軽めの夕食をとった後、静かな佇まいの小さなバーに入った。

照明は少し押さえ目にしてあり、BGMも内装の雰囲気も落ち着いた感じで、アイの趣味によく合っていた。

「へー、意外だなあ。タカユキさんこんない所知ってるんだあ。」

「失礼な。オレはこの辺りの飲み屋は全て頭にインプットされてるんだぜ。まあ、ここはタケルと見つけたただけだね。」

「えー、そうなの？一緒に一度も来た事ないよー。」

例の如く、アイは不満げだ。

「もう、ずいぶん長い事来てないからなあ。ここも。」

タカユキがそう言うと、カウンターの向こう側でバーテンが、

「北村さん、お久しぶりですね。たまには顔出してくださいよー。」と笑顔で挨拶した。

タカユキの酒豪ぶりは社内でも有名な話で、『いい飲み屋はヤツに聞け』と、言われていたほどだった。

「今日はきれいなお連れさんですね。デートですか？」と聞かれて、アイは

「ここ、ホントにいい店ね。」

と、すっかり上機嫌になってしまった。

(気難しいのか、単純なのか・・・)

タカユキは苦笑した。

「オレの会社の後輩でタケルの彼女だよ。そういやタケルは最近ここに来る？」

「郷谷さんですか？最近は全然来てくれないんですよ。お二人が来なくなっちゃって売り上げ落ち込んでるんですから…。今度来るように言ってみてください。」

そう言ってバーテンは笑った。

「んじゃ、お疲れさん。」

カチンツとグラスを合わせた後、アイは改めて店内を見渡した。

「ふーん、やっぱりいい店ね。」

「ここは、タケルとよく来てたんだ。あいつゴミゴミした所って苦手だろ？何か落ち着いて話す時にはここが一番だ。」

「落ち着いて話す事？」

アイは、タカユキの顔を覗き込む。

「そ。タケルとなんかあったんじゃないの？オレの目は節穴じゃないぞ？」

「あれは、ユキが暴走して・・・。」

アイは慌てて言い訳しようとした。

「ははは。そりゃ分かってる。あいつは昔から思い込んだら一直線だからなあ。」

「ねえ、この間ユキは、タケル君のことクールだとか言ってたけどホントに昔はそうだったのかなあ？まあ、落ち着いてる感じはすると思うんだけど。なんか、クールってのとイメージ違うのよねえ。」

「なんだ、気にしてるのか？まあ、確かにそんな時期があったかもな。だけど決して冷たいヤツじゃあないぜ。アイツは。そりゃ、お前がよく分かってるだろ？」

「まあね。」と、アイは微笑んだ。

「タケル君の事故の事なんだけど…。」

とアイが言うと、タカユキは『やっぱりな』と言う顔をした。

「オレもお前はもうとっくに知ってると思ってたからなあ。かなりひどい事故だったらしい。3日間意識不明だったしな。オレも後で聞いた話なんだけど、単独事故だって言ってた。現場にブレーキの跡もなかったって言うからなあ。」

「そんな酷かったんだ。」

アイは改めて驚いた。

「それから、タケルは長い間バイク止めてたんだよ。それが、ある日：確か、ここでヤツと飲んでる時だったんだけど、突然、復活宣言してなあ。」

アイは黙って話を聞いていたが、「何かあったのかなあ？」と口を挟んだ。

アイの頭の中では、タケルの事故の事と、先日タカユキから聞いた入院中に一人で見舞いに来ていた女の子の事、そしてタケルの友人の結婚式、それらのキーワードがグルグル回っていた。

はつきりとした関連性の証拠は見出せなかったが、それらと、最近タケルの様子がおかしい事が無関係とは思えなかった。友人の結婚式なのだから、その頃のタケルのほかの友達もやってくるだろう。

(その中に、その女の子もいるのかなあ…?)

その女の子が鍵を握っている可能性が極めて高いと感じていた。

アイは、何年も経って、今なお、タケルの心を奪ってしまっている(少なくともアイはそう思っている)その子に嫉妬を覚えていた。

「さあな、俺も聞かなかつたからな。ただ、その頃のアイツは、いつも考え事してるって感じだった。」

『ふーん』と言ったきり、また考え込んでしまったアイを見て、タカユキは、わざと明るい声で、

「言うておくけどなあ、タケルはお前に会ってからずいぶん変わったんだぜ。なんか明るくなった。驚いたよ。あいつからもう一度アイに会わせてくれて言われた時は。」

「それ、ぜんぜん知らなかった。タカユキさんが引つ張りまわしてるもんだとばかり…。」

「学生の頃から、タケルは付きまとわれる方専門だったからなあ。

オレに言わせれば、凄く珍しい事なんだぜ。アイ、何があつたか知らんけど心配する事もないんじゃないのか?」

なるほど、タカユキは自分を心配して誘ってくれたのか。

アイは、タカユキに感謝した。

「そうね。今いろいろ考えても仕方ないしね。再来週になったら、

いろいろ分かるだろうから。」  
「再来週？なんかあるのか？」

アイは、タケルの高校時代の友達の結婚式があること、最近、タケルの様子に違和感があることを正直に話して聞かせた。

「なるほどねえ。それで、昔の事を聞きたがってたわけだ。何かあったとしても言わないだろうなあ。タケルは『超』が付くほど強情だから。でも、言うべき時がきたら向こうから勝手に喋るさ。あいつはそういうヤツだよ。もしホントに都合が悪けりゃ、お前の出席をどんな手を使ってでも阻止するだろうよ。要は、あいつ自身の中の問題なんだろう。しばらく時間をやりな。」

ほれ、飲め。オレは辛気臭い酒は嫌いなんだ。」

アイは、笑顔で頷いた。

「タカユキさんって考えてないようじゃ考えてるんだね。ちょっと見直した。」

「お前…、オレをどんな目で見てた？やっぱりユキに感化されてるぞ。」

タカユキは不満げにそう言うと、次の酒を二人分注文した。

タケルは仕事場から帰宅すると、すぐにバイクのエンジンを掛けて暖機運転をしていた。

掛かり具合や異音がしないかの確認、またバッテリーの自然放電を防ぐ為である。

平日なかなか乗る機会がないため、きちんとしたコンディションを保つため、習慣づけている事であった。

明日は、斉藤ミサキとの約束の日だ。

まるで、小学校の時の遠足の前日のような待ち遠しい気持ちだった。

彼女とは、実に5年も顔を合わせていない。

会ったら何を話そう？

彼女に何から訊こう？

5年と言えば決して短い時間ではない。

自分自身のことを振り返っても様々な事があった。

仕事も面白くなってきたし、2年前に主任に昇進もした。

今では、部下もいる。

プライベートでも、アイと出会い、とても幸せな日々を過ごしている。

(アイツは、この5年間どうだったんだろうか?)

タケルの元に届いている情報と言えば、5年前に彼女が結婚した事、そして、先日シユウから聞いた、一昨年に離婚したと言う事だけだ。それだけを考えてみても、激動の5年間であった事は容易に想像が付く。

先日の電話の声で判断する限り元気そうではあったが……。

(アイツは変わってしまったんだろうか?)

(オレは変わってしまった様に見えるんだろうか?)

そんな不安が彼の頭を掠める。

(やれやれ、ここんどこ昔のことばかり考えてるな・・・)

タケルはバイクのスロットルを軽く開けた。排気音が、それに一段階大きな音で瞬時に反応する。エンジンの調子はいい様だ。

それを確認すると、また思考はミサキのほうに引き寄せられていく。。。

きっかけは親友『シユウ』の結婚式の招待状。

タケルはふと、思い出した。

すっかり忘れていたが、シユウにスピーチと、もうひとつ『頼まれ事』をしていたのだ。シユウの婚約者とミサキは友達である。

しかし、おそらくはシユウとミサキが、かつて恋人だった事を知らないであろうその婚約者に余計な心配を掛けないようにうまく立ち回ってほしいという・・・。

タケルは、シユウに電話をしてみる事にした。

『もしもし』

「シユウか? オレだ。ミサキと連絡取れたぞ。」

『ホントか? 元気にしてるのか? アイツは。』

「元氣そうだったよ。久しぶりだったし、お前が妙な事言うもんだから少し緊張しちゃった。」

『ははは、いいじゃないか。』シユウは笑いながら言った。

『タケル、こつちの事は心配しなくていいんだぜ。実はなあ、嫁さんはもう全部知ってるんだ。』

「何をだ？」

『鈍いなあ。相変わらずお前は。オレとミサキの昔の事に決まってるだろーが。』

『この間お前と会った後、やっぱり、ちゃんと説明したほうがいいだろうと思ってな、嫁さんに話したんだ。』

「思い切ったな。随分。」

『おお、決死の覚悟だったぞ。この間のお前の反応見た感じじゃあ、戦力外と思ったからな。お前のほうがショック受けてみたいだったし。』

「失礼な…。」

そうは言ったが、シユウには全て見透かされていたようだった。内心、大した男だと思った。

『まあ、ひと悶着あったが何とか落ち着いたぞ。それに、オレもミサキにはすつきりとした形で会いたかったからな。』

「それはそうと、なんでアイの参加をOKしたんだ？」

『オレが見たかったからだ。』

そうきっぱりと言ってシユウは笑った。

「全く…。今度はオレの方の話がややこしくなったらどうするんだ？」

『それは、タケルに迷いがあるからだ。ミサキに対しての気持ちにな。凶星だろうが？話を聞いた限りじゃ、アイちゃんは勘がいいんだろ？』

「ああ、恐ろしいくらいにな。」

『それに加えて、タケルは何か異変があるとすぐに分かるからなあ。』

まあ、『分かるヤツには』なんだろうけど。』

「そうか？そんな事ないと思うけど…。」

『まあ、そんな調子じゃ、そろそろかんぐられてる頃だぜ。』

「脅かすなよ。」

シユウは、ちよつと間を空けた後、

『タケル、お前ホントにミサキの気持ちに気が付かなかったのか？』  
と聞いた。

タケルは、急に真剣な声になったシユウに驚いたが、

「嫌われてはいないとは思ってたが、オレをそんな風に思ってくれたとは知らなかった。」

と、正直に答えた。

『全く…、お前というヤツは…。』

あきれたような、あきらめたような、しかし、いつものシユウの声に戻っていた。

『まあ、それでこそタケルだ。でもなあ、正直ミサキが結婚した相手がお前じゃないって知った時には、愕然としたぞ。』

「オレもいきなり結婚したって知った時は、驚いた。」

『いきなり？お前もか？それじゃ、あの時、ミサキに何かあったのは確実だな。』

「何かって？」

『知らん。それを訊くのはオレじゃなくてお前の役目だ。』

タケルは、シユウに明日ミサキと会うことを告げた。

『そうか…。で、お前はどうするんだ？』

「わからない。今のオレにはアイは掛け替えのない存在だからな。正直、迷ってる。オレはミサキが好きだった。今でも、やっぱり大切な存在だと思う。」

『やっぱり、アイちゃんも式に呼んで正解だったな。』

「何でそうなるんだ？」

『お前は少々ハードな状況にでもならんと、なかなか前に進めないからな。』

『シユウ、この間会った時から、こうなると思ってたのか？』

『当たり前だろ。お前のことはお見通しだ。』

そう言つてシユウは笑つた。

『タケル、オレはお前の出す答えに文句をつけるつもりはない。ただ、もうそろそろ、ケリをつけなきゃいけないと思う。お前にとつても、ミサキにとつても、もちろんアイちゃんにとつても…な。』

「ああ、わかつてる…。」

電話を切つた後、シユウの言葉がいつまでも耳に残っていた。

(明日、とにかく明日だ。)

その日タケルは、眠れない夜を過ごした。

翌日の午前11時40分。  
待ち合わせ場所のS駅の南口ロータリーには、一台の赤い大型バイクが止まっている。

（やっぱり、ちょっとはやく着いちゃったな。）

日曜日の道路事情を考えて、それほど大きくない駅での待ち合わせにしたのだがタケルは、混雑を予想して少し早めにアパートを出発していた。

駅を見渡したが、まだミサキの姿は見当たらない。

タケルは、駅の階段を下りて現れるだろう彼女の姿を思い浮かべながら、そわそわしていた。

（ホントに久しぶりだからなあ…。）

今日、ミサキと会うことは、アイには内緒にしてある。タケルはそのことに罪悪感を感じていた。

（さて、アイにはなんて説明したもんかなあ…。）

これが、ミサキ以外の友達であれば、「ちょっと、友達に会いに行ってくる」で済ませられたのだろう。

タケルの頭の中では、昨日のシユウの言葉が、まだ離れなかった。

お前に迷いがあるからだ…  
そろそろケリをつけなきゃいけないと思う…

（おせっかいな奴だ。全く…。）

しかし、シユウの言うとおりだと思った。

自分の気持ちをきちんと整理しよう。

どんな結末を迎えたとしても、また、アイツと笑って話せるように…。

約束の正午になった…。

駅前の時計台のオルゴールが大きな音で鳴り響いた。

それに合わせて、時計の文字盤から機械仕掛けの人形たちが出てきて楽しげに踊り始める。

それを見た子供たちが、キヤーキヤーと歓声を上げていた。

タケルは、その光景をしばらく眺めて少しだけ微笑んだ。

そしてまた駅の階段に視線を戻す。

ミサキの姿はまだ見えない。

（しょうがねえヤツだ。こんな時に遅刻なんかしやがって…。）

心の中でミサキに毒ついてみたが、その表情はとても穏やかだった。

（まあ、5年も待たされたんだ。今更もう少しくらい待たされてもどうってことないけどなあ。）

やはり、嬉しかった。

彼女に会えることがとても嬉しかったのだ。

遠くのほうで、甲高いバイクの排気音が聞こえた。  
タケルは、バイク乗りの習性からなのか、車種の限定まではできないが、排気音をかなり細かく聞き分けられる。

(250のツインの2ストエンジンだな…)

瞬時にそう思った。

それは、高校時代に初めて自分で買ったレーザーレプリカと同じタイプの音だった。

その音は、だんだん近づいてきて、ロータリー手前の交差点に姿を現した。

(やっぱりな…。ふーん…RS250か。)

赤信号で停車している、その音の主を見てそう思った。

現在は、バイクの馬力規制、排気ガス規制が強化されたため、タケルの中学、高校時代にはたくさんあった、そのエンジンタイプのモデルは、国内では数少ない中古車を除いて、全くといっていいほど販売されていない。

タケルは、ロータリーに姿を現した、その外国製のバイクをもう一度チラッと見て、自分の予想が当たっていた事を確認すると、また、階段の方に視線を戻した。

『ビッビーーーーー!』

突然後ろから、すぐ近くでクラクションが鳴った。

タケルが、驚いて振り返ると、そこには、さっきのバイクが止まっていた。思わず、そのライダーにムツと来て、そのフルフェイスのヘルメットの中を覗き込もうとしたが、スモークシールドだった為、

よく確認できなかった。

タケルは文句の一つでも言ってるように身構えていたのだが…。

『ごめん！間に合わなかった！結構待った？』

予想に反して、ヘルメット越しのくもった女の声だった。

出鼻をくじかれ、リアクションの取れないタケルをよそに、そのライダーは、バイクに跨ったまま、ヘルメットを脱いだ。

「ああー！？」

それ以外タケルは、言葉が出てこなかった。

ヘルメットから少し長めのストレートの髪が滑り落ち、目の前に現れたのは、

実に5年ぶりに見た、斎藤ミサキの笑顔だった。

## 第9話 告白

・・・深夜に鳴り響く携帯電話・・・  
・・・けたたましく鳴り続けるそれを疎ましく眺める・・・  
・・・その音は、一度途切れて再び鳴り始める・・・

「もしもし・・・。」

『タケル、聞いたか？』

「シユウか・・・どうした？こんな時間に・・・。」

『ミサキのことだ。』

珍しくシユウは、興奮気味に言った。

「ああ。」

『何を呑気に・・・あのミサキがだぞ！』

「・・・分かってるよ。」

『・・・何かあつたのか？』

「別に・・・何も。」

何もなかった。

悲しいくらい何も・・・。

タケルは、ここ数日、色々な事を考えようとしたが、どれも答えな  
ど出なかった。

そんな時の電話に苛立ちを感じた。

シユウからの電話を初めて疎ましく思った。

『タケル、お前何を考えてる。』

シユウの口調は、明らかに不機嫌なものだった。

「考えたって、わからねえモンはわからねえんだよ！」  
気づくとタケルはシユウにそう言い放っていた。

言った後、酷い自己嫌悪に陥った。

まるで、永遠とも思える、たった数秒の沈黙…  
その後…、

『…遅くに悪かったな。』

そして、そのまま電話は切れた。

タケルは携帯を眺めながら、もう一度鳴る事を願った。  
しかし、その夜、再びそれが鳴ることはなかった…。

…どこで何を間違えたのだろうか？…  
…何度問いかけてもその答えは見つからない…  
…時は残酷なほど正確に流れ続けて…  
…そして、過去はそのままの形で凍りつく…  
…もう誰にも変えることはできない…

タケルのバイクのすぐ前を、ミサキのバイクが走っている。その彼女の、後姿を眺めながら彼の心臓は、まだ、ときどきしていた。

駅の階段を下りて来るとばかり思っていたミサキが、なんとバイクに乗って颯爽と現れたんだから…。

「ふふ、驚いたようね」

彼女は、目を真ん丸くしていたタケルを見て、満足そうに言った。

「当たり前だろ。」

「内緒にしておいた甲斐があつたわ。」

5年ぶりに見た彼女は、以前よりも少し大人びたように見えた。

それに少し痩せただろうか。しかし、その笑顔は昔と変わっていないように見えた。

そして、夏物の赤×黒のレーシングジャケットを着て、同色のレーシングバイクに跨って微笑む彼女を見て、とても絵になると思った。とても綺麗だと思った。

「斉藤、お前いつの間にバイクなんか…？しかも、思いっきりレプリカだし…。」

ミサキはその質問には答えずに、

「ここでじゃ何だから海のほうに行こうよ。この先に海浜公園があったでしょ？」

と言って、エンジンを掛けた。

「道、分かるのか？だったら、お先にどうぞ。」

「了解。郷谷は方向音痴だから、どこ行っちゃかわかんないしね。」

「無礼な…。」

（やっぱり、斉藤は変わってないのかな？）

そう思いながら、タケルもエンジンを勢いよく掛けた。

海浜公園は、S駅から30分ほどのところにある。

そこまでの道中、彼女のライディングはとてもスムーズで危なげなく、後ろからそれを見ていたタケルは、大したもんだと感心した。

駐車場にバイクを止めた二人は、海が一望できるレストランに入った。

店内に入ると、一番窓際の席に案内され、タケルはシーフードドリフトとアイスコーヒーを、ミサキはカルボナーラとサラダとストレートティーを注文した。

注文を取り終えたウェイトレスが二人のテーブルを離れてから暫くの間、

二人は何も言わずに顔を見合わせて微笑んでいた。

「…実は今、困ってるんだ。」

「何で？」

「聞きたい事が多すぎて、どこから手をつけていいか見当も付かない。」と言ってタケルは笑った。

「その気持ち、私も痛いほど分かるわ。」と、ミサキも笑った。

「この間、随分久しぶりに、シユウに会ったんだ。元気そうだったよ。いろんな話をした。斉藤のこともね。」

「シユウか…。懐かしいわね。」ミサキは目を少し細めた。

「でも、『随分久しぶりに』って、シユウとどれくらい会ってなかったの?」

「うーん、4年以上…。斉藤が結婚した後くらいから。予定も合わなかったし、しばらく空いちやうと何か気まずくてな。」

「以外ね。二人にもそんな事ってあるんだ。」

「そうだな。何でそんな風になっちゃったのか自分でも分からなかったんだ。」

「『かった』?」

「ああ、ここ数週間でやっとその原因が分かったよ。随分と時間がかかったけどな。」

「原因って?」

タケルはそれには答えず、ただ柔かく微笑んだ。

あの時、シユウはタケルのことを許せなかったのだろう。

易々とミサキを他の男に取られてしまったタケルの事が…。

先日再会した時に、シユウはミサキの事を　　やっぱりアイツは特別だったから…　　と言っていた。

ミサキの望んだ相手が親友だったからこそ身を引いたのだ。

自惚れではなく、シユウは、ミサキをタケルに託したかったのだろう。

もちろん誰にもそんな事を決める権利などない。

だから、あの時シユウは何も言わなかった。

しかし、歯痒くて、悔しかったに違いない。

何年も後によやくその事に思い至ったタケルは、

ひどく胸が痛んだ。自分の不甲斐なさに涙が出そうだった。

久しぶりのシユウとの再会、そして昨日の電話……。  
今までずっと分からなかった彼の言動の理由の一つ一つが解明されていった。

それでこそタケルだ

そして、その言葉に救われた自分がいた。

( やっぱり、アイツは最高の親友なんだ。 )

と、改めて思った。

運ばれてきた料理を食べながら、当たり前障りのない程度のお互いの近況を話した。

タケルは、仕事が面白くなってきた、その代わりに忙しくなっちゃったので飲みに行く機会が、随分減ってしまった事なんかを。

ミサキは、今勤めている歯科医院のことや、住んでいるY市の事、近所に黒い野良猫がいて、その猫に結構懐かれている割には、なぜか無愛想なのが気に入っている事なんかを話した。

そのテーブルを傍から見たら、とても仲のよい夫婦か、恋人に見えただろう。

食後、タケルは窓の外を眺めながらタバコに火を点けた。

「シユウと久しぶりに会ってから、今日までの間いろんなことを考えたよ。自分の餓鬼さ加減に嫌気が差した。

いろいろ気が付いた。シユウの気持ちや、斉藤の気持ちも……。オレはどうも人より成長する速度が遅いらしい。」

3センチほど吸ったタバコを静かに灰皿に押し付けてから、タケルは続ける。

「いや、ホントは今までだって、その可能性は何度も考えたはずなんだ。でも、確信がないから、うやむやのままになってたんだ。結局はオレの弱さだ…。待たせたのはオレの方だったんだな。」

ミサキは暫く、そのまま表情を硬くしていたが、わざとらしく『ふーっ』と溜息を一つ吐くと、

「随分と長い道のりだったわねえ。」

と、苦笑しながら言った。

「全くだ。」

二人は、顔を見合わせて笑った。

二人は、レストランを出ると、海のほうへと歩いていった。ミサキが、

「せっかく海に来たんだから、せめて砂浜くらい歩いておかなきゃ罰が当たるわよ。」

と言ったからだ。

「そんなもんかねえ。」

「そんなもんよ。」

土曜日の午後であったが、それほど暑くなかったので、人の疎らな浜辺を、並んで少し歩いた。

「そういえば、郷谷と昼間こうして出歩くのなんて高校の時以来よね。」

「ああ、シユウが学校休んだ時くらいだったかな。」

「いつも3人だったしね。」

「卒業した後は、夜に居酒屋で飲んでばかりだったし……。」

「そうね。」

ザザーンという規則的な波の音が静かに、しかし確かに響き続ける。少し風があつたが、それがとても心地よかった。

タケルは、特別海が好きというわけでもない。それに、これほど在り来たりなシチュエーションは他にはないと思う。

しかし、実際に自分がその場に立つと、今更ながらやっぱり使い古されるだけの魅力はあると思った。

もちろん、隣にミサキがいることが、大きな要因である事は間違いない。

なかったが。

ともかく、海を前にすると人間の小ささを痛感する。やはり、そんな使い古された表現が、タケルの頭の中に自然と流れ込んできた。

(ちっぽけなもんだよなあ。)

タケルは、ミサキを眺める。

ミサキは、その視線に気づき、

「どうしたの？」と聞いた。

「斉藤……。5年前に何があったんだ？」

おそらくは、ミサキもこの質問を受ける事を予想していたに違いない。ミサキは立ち止まった。

「聞きたい？」

ゾクツとするほど綺麗な笑顔だった。

しかし、どこか悲しげで、何故か胸が痛んだ。

今までの自分だったら、『言いたくなきゃ無理には訊かないけど……』  
そう答えていただろう。

人には、言いたくない事の一つや二つはあるものだ。

それが優しさってモンだと思っていた。

でも、実は都合の悪い事から逃げただけだと思う。

今まで、ミサキは自分の本音を言えなかったんじゃないか、自分がそれを聞きたくなくて、言い出す隙を与えなかったんじゃないか、そう思った。

あの頃の失敗を二度と繰り返してはならない。

多分、ミサキの話はあまり楽しい話じゃないだろう。

それでも、自分はそれを彼女の口から訊かなくてはならない。

「聞きたいね。是非。」

タケルはかみ締めるようにそう答えた。

「長くなるよ?」

「おお、望むところだ。」

二人は、灯台の傍のテトラポットに並んで座った。そして、ミサキの長い話が始まる…。

3

ミサキの話は、ある程度タケルが予想していたものに近かったが、タケルにとっては予想を上回る衝撃的なものだった。

ミサキは、時折、言葉を詰まらせながらも淡々とこの5年間に起こったことの経緯を語った。

タケルは、「うん」とか「そう」といった、わずかな相槌を入れるだけで後は、黙ってミサキの話聞いていた。

彼女の言葉の一字一句も聞き漏らすまいとして…。

妊娠した事…。

それを当時の彼氏が知って、結婚する事になった事…。  
精神が不安定になった事…。

流産した事…。

そして、手紙の事…。

「あの手紙は今でもちゃんと持ってるよ。」

ミサキは最後に少し明るい口調でそう言った。

タケルは、しばらくじっとミサキの話を頭の中で整理しようとしたがうまくまとまらなかった。

「何か大変な事があったんだろうとは思ってた。でも、予想以上だったよ。」

タケルは素直に感想を言った。

「結婚の事は、自分のことだからいいんだけど…、子供がね…。あれが一番辛かった。」

「今でもね…、たまに夢に出てくるのよ…。いつも泣いてるの…。その子の顔が見えないのが救いだけだね。」

ミサキは、ふーっと息を吐くと空を見上げた。タケルはその様子を見て、胸が痛かった。

自分の気持ちにもっと早く気が付いていれば…、  
ミサキの気持ちにもっと早く気づいていれば…、  
今さらそんな事を考えている自分に腹が立った。

「離婚したのも、それが原因なのか？」

「ううん、それはまた別よ。私の気落ちの問題。あの頃は鬱病みたいになってたし…。あ、でも、言っておくけど前の旦那はいい人だったよ。凄くね。」

私が半ば家出みたいにして飛び出しちゃったのよ。どうしても気分変えないとおかしくなりそうだったから。」

「旦那は何て言ってたの？」

「随分引き止めてくれたよ。凄く優しい人だったから。でも、私が折れなかった。最後は、旦那に私がどれだけ嫌な女か懇々と説教したわ。」

そう言っつて、ようやく少しだけ笑った。

「そりゃあ、さぞかし、おっかなかっただろうな。」

タケルはそう言っつて笑ったつもりだったが、自分でうまく笑えているか自信がなかった。

「斉藤は、頑固だからなあ。」

「郷谷に言われたくないわよ。」

「オレも頑固かも知れないが、もう少しかわいげがある。」

「あら、それっつて私に喧嘩売ってるのかしら…？」

タケルは大げさに両手を挙げると「恐れ多い事です…。」と、おどけた口調で言った。

「まあ、いいわ。」

そう言っつて、ミサキはまた、海に視線を戻した。

「ありがとう…。」

タケルは一瞬その言葉の意味が分からなかった。

「初めてなのよ。この5年間、誰にも話すチャンスがなくて…。ちやんと聞いてもらったのは、これが初めてよ。」

5年間…。これほどの事をそんな長い間一人の胸の内にしまいこんでおけるものなのだろうか。

タケルはそう考えるとまた胸が苦しくなった。

ミサキは、タケルの表情が変わったのを知ってか、知らずか、

「はい、暗い話はこの辺でおしまいよ。」

と、明るい声で話を打ち切った。

「次は私が質問する番よ。」

唐突にミサキは言った。

「郷谷タケルはこの5年をどう過ごしていたの？」

「オレのほうは、相変わらずだ。仕事して、家に帰っての繰り返しだよ。三年前に出会ったアイって子と付き合ってる。いい子だよ。凄くね。」

概ねそんなとこだ。

一番の事件は斉藤から手紙もらった時のことだよ。ショックだった。今までで一番落ち込んだんじゃないかな。

結婚なんてそれまで考えたことすらなかったからね。」

そこで一度言葉を区切った。ミサキはタケルをじっと見ている。タケルは決心して、言った。

「あの時、オレがどれだけ斉藤の事が好きなのかを思い知らされた。」

この台詞を伝えていいものか、タケルは最後まで迷っていた。今更、そんな事を言っただけになるのだろうか？

ミサキの壮絶ともいえる5年間を否定する事にならないか？自分が楽になりたいだけじゃないか？

しかし、自分だけ本当の気持ち晒さない事はフェアじゃない。どうしても、今、伝えなければならぬ。二人が前に進むために…。

「やっぱりね。そうか、そうか。私に惚れてたか…。」

ミサキは笑顔でそう言った。どこか不自然な笑顔だった。

「その前から、そうじゃないかと…思ってたん…。」

言葉の最後が震えていて聞き取れなかった。

ミサキの異変に気づき彼女を見ると、その瞳から涙があふれていた。涙をすぐに手でぬぐったが、後から後からあふれ出てきてぬぐう手が追いつかなかった。

彼女は思わず両手で顔を覆った。

タケルは思う。

この台詞は一番聞きたくて、聞きたくなかった台詞だったんじゃないか、と。

そして、この涙は自分にだけは見られたくないか、涙じゃないかと。

ミサキは肩を震わせ、声を押し殺して泣いていた。

今の俺に何ができる…？

オレは大馬鹿野郎だ！

タケルは、思わず彼女を抱きしめていた。

もしも、5年前に時間を戻せるなら、自分の寿命を30年差し出し、でもかまわないと、本気で思った。

しかし、今の自分にできることはたったこれだけしかなかった。

それが、どうしようもなく悔しくて堪らなかった。

タケルの腕の中で泣き続けているミサキの肩は、想像していたよりも、ずっと細かった…。

ミサキは、それから随分長い間泣き続けていた。

ようやく、泣き止んでからも、目を閉じたまま、タケルの胸に顔を埋めてじっと動かなかった。

タケルは何も言わずに、そのまま彼女を抱きしめていた。

波の音は、なおも規則的に響き続け、太陽は西へ、西へと傾き始め

ている。

タケルは、ミサキの髪を撫でると、

「少し落ち着いたか？」

と聞いた。我ながら、間抜けな言い方だと思った。

すると、ミサキはそのままの体勢から右手を伸ばして、タケルの頬をギョツと抓った。

「いてえな、何すんだよ。」

「その口が言うか、その口が。」

ミサキの口調は、まるで3人が初めて出会った、まだ、幼さの残っていたあの頃のようなだった。

「全く…。」

タケルはそのまま、ミサキの髪を撫でていた。

「なんか、気持ちいいねえ。寝ちやいそうだよ。」

目を閉じたままそう言ったミサキの顔は、まるで子供のように見えた。

「風邪引くぞ。」

「そしたら、郷谷に移して治す。」

「何てヤツだ…。」

こんな無防備なミサキを見るのはいつ以来だろうか？  
いや、ひょっとしたら初めてかもしれない。

大げさかも知れないが、ミサキは、今までずっと戦ってきたのだ。気を張り続けて過ごしてきたんだろう。

タケルは、その重い戦士の鎧をはずした素の彼女を目の前にして、とてもうれしく、しかし、痛々しいと思った。

タケルは自分の上着を脱ぐと、ミサキの背中に掛けた。

「おお、気が利くねえ。」

「偉そうに……。」

「なにさ、ちょっとは優しくなさいよ……。」

ミサキは少し言葉を区切ったあと、「今だけなんだから……。」と言った。

ミサキの髪を撫でていた手が一瞬止まった。

そう、二人とも分かつている。

明日からは、また、いつもの日常に戻る。

今の暮らしがある。

この5年の空白は二人にとって致命的なものであると。

( やつと、気持ちを通じたのに……。 )

やりきれない思いだった。

おそらく、ミサキも同じだろう。

せめて、少しでも長くこうしていたかった。

「郷谷。」

「ん？」

「郷谷の彼女ってどんな子？」

目を閉じたまま、ミサキは訊いた。

「うーん、明るい子だよ。斉藤みたいに喜怒哀楽が激しくて、結構手を焼いてるんだけど、悪くない。」

「アタシはそんなに喜怒哀楽激しいかなあ。」

「自分のことはなかなか見えないもんだ。」

「ふん、なにさ。」

「まあ、拗ねるな。」

「…その子の事好きなんだ？」

「まあな。」

「結婚するの？」

「まだ分らない。けど、いずれはと思ってる。」

「やれやれだわ。」

「なんだそりゃ。」

そう言うとタケルは、くしゃくしゃと少し乱暴にミサキの頭を撫でる。

「斉藤の今の彼氏がバイクの師匠なんだろう？」

「んー？なんでそう思うの？」

「そんな気がした。」

「あつたりー。」

「やれやれ。」

「なによ、それ。」

それから、日が落ちるまで二人はそのまま何も言わずに過ごした。

「郷谷」

「ん？」

「手紙に書いてたあの言葉なんだけど…。」

ミサキの口調には、もうさっきまでの弱々しさはなかった。

直感的に別れの時が近づいている事を悟った。

「あの言葉？」

「そう、あの言葉。」

タケルは、ミサキをギュッと抱きしめてゆっくりと言った。

「オレは、いつでもお前の味方だ。」

「ホントに？」

「ああ。」

「一生？」

「ああ。」

「よし！」

ガバッとミサキが起き上がった。

「郷谷、その台詞忘れるなよ！」

と、元気な声で言った。

「忘れられるわけないだろ。」

「もし、郷谷が結婚失敗したら、私が貰ってやるから安心しなさい。」

「偉そうに……。」「

ミサキは立ち上がって『うーん』と大きく伸びをした。

タイムオーバー…。

非日常から日常へ…。

辛かった。でも、もう一人で抱えることはない。  
その思いを分かち合える人がいる。  
例えそれが叶わなくても…。

駐車場へ歩いていく二人に言葉はなかったが、気持ちの通じ合った  
ものだけがわかる連帯感という確信があった。  
今日、会えて本当に良かった。そんな満足感があった。

別れるとき。

二つの排気音が夜空に綺麗に響き渡った。

「斉藤、シユウの式には来るだろ？」

「うん、やっぱり、ちゃんと見届けないとね。」

「じゃあ、再来週だな。」

「うん。」

タケルとミサキの帰り道は反対方向なので、この駐車場で分かれる  
ことになる。

バイクに跨ろうとした時、不意にタケルの脳裏に、二十歳の時の事  
故の事が鮮明に蘇った。

「斉藤。」

「なに？」

「気をつけてな。」

ミサキもタケルの言葉の意味にすぐに気づいたようだった。キュッ  
と、唇をかみ締める。

「大丈夫。私を誰だと思ってるの？そんなへましないわよ。」と明るく言った彼女の瞳は潤んでいた。

「全く…。それが危ないって言ってるんだよ。」

タケルはミサキに歩み寄った。

ミサキは思わずタケルに抱きつく。

そして…二人は…

最初で最後であろう…

長い、長い、キスをした…。

## 第10話 拳式

1

地元の中学校のフェンス沿いの道を、太陽の柔らかな日差しが照らしている。

そのフェンス沿いに植えられている桜の木々は、今は緑の葉が力強く茂っていて、そよ風がその葉をやさしく揺らしていた。

その道を、スーツに身を包み、いつもよりもちよつと大人びたメイクをした吉河アイは、その木々を眺めながら歩いていった。

(ついに、この日が来ちゃったなあ…)

今日アイは、タケルの高校の友人の結婚式にタケルと一緒に出席する。

タケルの住むアパートは彼女が駅に行く途中にあるので、彼女はタケルのアパートに彼を迎えに行くところだった。

結局アイは、タケルの過去について、あれこれ考えるのを止めていた。

気にならなかつたといえば嘘なのだが、アイがそれを詮索して、誰と何があつたのか暴き立てる事は無意味に思えた。

先週、タケルと会った時、なんだかタケルの雰囲気違って見えた。いつもそうだと言えばそうなのだが、とても穏やかであった。

その前に会った時に強く感じた不安定さ、危うさは、影を潜め、なんだかすつきりしたような顔をしていた。

いつもよりも、大人に見えた。

(あの後、また、何かあったのかなあ。)

最初にアイが、披露宴に連れて行ってくれと頼んだ時、タケルは随分困ったような顔をしていたのに…。

(タカユキさんが言ってた、自分の中の問題…、片付いたのかな?)

アイは、少し寂しい気がしていた。

タケルは、いつも穏やかでやさしい。

彼に対して、不感や不満を持った事はほとんどない。

(でも、いつも、自分で解決しちゃうんだよなあ…。)

自分を頼ってほしいとは言い過ぎかもしれないが、何かちょっとでも力になりたいと思う。

(気づかなければ、少しは楽なんだろうけど。)

初めて、自分の勘の良さを疎ましく思っていた。

ふと、何かどこかで音が聞こえると思って、耳を澄ませると、ハン ドバックの中の携帯が鳴っている。

取り出すと、そのディスプレイには『橘 ユキ』と表示されていた。

「もしもし」

『おっはよー!』

思わず、アイは苦笑した。

「おはようじゃないでしょ?もう12時過ぎてるよ。まさか、今まで寝てたの?」

『正解』

「…全く、相変わらずねえ。で、どうしたの？」

『相変わらずなのはお互い様よ。』「どうしたの？」「じゃないでしょうが。今日なんでしょ？」『X』との決戦の日は。コンディションは万全なんですよ？』

「まあ、体調はいいけど。でも決戦って…、穏やかじゃないなあ。」

『あーっ！この子は！平和ボケにもほどがあるわよ！あれほど言っただじゃないの。もう！』

アイは、電話の向こう側で頭を掻き毟っているユキを想像して笑った。

ユキはいつもパワフルで元気だ。

そして、一見乱暴に思える言動にも、その底にはちゃんと思いやりがある。

たまに、暴走する事もあるが…。

そんなユキと一緒にいるおかげで、自分は落ち着きを取り戻せる。

そして、ユキの暴走を止められるのは自分だけだと言う自負がある。

その代わり、ユキはいつも自分に元気を分けてくれる。

高校時代から今まで、何度ユキに元気付けられただろう。

『笑い事じゃないわよ！しっかりしなさい！』

ユキは、寝起きだというのに相当エキサイトしているようだ。

アイは、この親友に改めて感謝した。

この子とは一生こんな風にいられたらいいと思う。

「大丈夫よ、心配すぎだよ、ユキは。だいたい、もし、タケル君に後ろめたい事があるならアタシを連れて行くわけじゃないじゃない。」

この間、タカユキが言っていた事だった。

もちろん、アイにもまだ不安は残っているが、確かに説得力はあった。

その台詞を、まるで自分に言い聞かせるように、ユキに言った。

『まあ、そうなんだろうけどサ。』

ユキも不満そうではあったが、一応納得したようだ。

『でも、油断しちゃ駄目よ！背後に隙を作っちゃ駄目！常に周りを見渡して・・・』

アイは、声を上げて笑った。

やっぱりこの子は最高だ！そう思った。

『笑う所じゃなでしょ！』

「大丈夫！アタシに任せなさい！お土産話、期待していいわよ。」

アイは、元気にユキにそう宣言した。

何か、吹っ切れた。

タケルのアパートはもうすぐそこである。アイは足取りも軽く、アパートの階段を登っていった。

タケルの部屋のインターフォンを鳴らすと、すでに礼服に着替えて白いネクタイを締めたタケルがドアを開けた。

「あら、もう準備できてるんだ。早かったね、今日は。」

「今日は、とは何だ。失礼な。」

笑いながらタケルはそう言うと、ペシッとアイのおでこを軽くたた

いた。

「まだ時間あるから、上がってけよ。アイスコーヒーでいいか？」  
「あ、別にいいのに。」

なんてことはない。要はタケルが飲みたかったようだ。

部屋に上がったアイはベットに腰掛けた。いつものアイの指定席だ。ぐるっとその部屋を見渡す。

必要と思われる家電、家具などは一式そろっているが、それ以外にはあまり物がない。

随分前、アイがため息混じりに、「もうちょっと、なんか物置けば良いのに…。」と言った時タケルは、

「いいよ、掃除とか面倒だし、シンプルなのがいい。この部屋のコンセプトは必要最低限の機能美ってヤツだ。」  
と、言っていたことを思い出した。

(シンプルって言うか殺風景なのよねえ…。)

アイは、いかにもタケルらしいと思う。

もし、自分がタケルと結婚したら、部屋の内装のあり方でもめるに違いない。

(多分、アタシが押し切るんだろうなあ。)

そんな日が来てほしいと思う。

「アイ、ミルクは？」

ハッと我に返ると、アイスコーヒーを手にしたタケルがキッチンか

ら戻ってきた。

「ああ、ありがと。一つもらうね。」

「今日、晴れてよかったなあ。帰りは引き出物とか荷物あるから…。」

「

「そうだね。日頃の行いね。」

「誰の？」

「さあね。」

「雨降っても同じ事言うんだろ？」

タケルはにやつと笑ってそう言った。

アイは、その様子を見て、

( やっぱり、なんかすつきりしたような感じなんだよなあ。 )

と思った。

「ねえ、今日、式を挙げる坂本さんってどんな人なの？」

「おお、そーいや説明してなかったっけ。」

「全く、いきなり行ったら恥かくじゃない。」

「悪い、ヤツはオレの中学・高校の親友だ。」

アイは、タケルの口から『親友』という言葉聞いたのは初めてだったので、正直驚いた。

「あの頃はいつも一緒だった。まあ、どっちかと言うと悪ガキだったな。不良ってわけじゃなかったけど。いつも冷静で、オレの事をオレよりも知ってるヤツだ。」

そう、嬉しそうに話すタケルを見て、まだまだ、タケルについて知らない事がたくさんあることに少し寂しさを覚えた。そんな、アイの様子に気づいたのか、

「ヤツとはここ何年も連絡とってなかったんだ。この間、電話で話した時に、アイの事も話したんだけど、ヤツもアイに会いたがってたよ。連れて来いってさ。」

と言って、アイの頭を撫でた。

アイは、タケルに頭を撫でられると、不思議と安心する。付き合い始めた頃から、いつもそうだった。

アイがむくれたり、落ち込んだりした時に決まってタケルがそうしてくれた。

時に、それでごまかされているんじゃないかと思ったこともあったが…。

「タケル君の中学・高校時代ってなんか想像付かないなあ。」

「失礼な、オレにもそんな時があったの。」

「もう一人、アイに会わせたいヤツがいるんだ。」

アイスコーヒーを一口飲んでタケルは言った。

タケルの表情がちょっとだけ硬くなったような気がした。

「もう一人？」

「ああ、もう一人のオレの大事な仲間なんだ。昔は嫌って言うほど一緒だったんだけどな。オレと、今日式を挙げる坂本修二と、そいつが3人そろうのは、二十歳の時以来だ。」

と、目を細めた。

「アイ、今日は忙しくなるかもな。なんせオレの半生の縮図がそこにある。」

「任せなさい」

アイは、にっこり笑ってそう言ったが、

(もう一人…か)

何故か、その一言が耳から離れなかった。

2

会場となっている都内のホテルには、すでに大勢の人が賑わっている。

タケルとアイは、会場の受付を済ませ、ご祝儀袋を手渡すと、待合所となっている、ロビーへと歩いていった。

結婚式は、午後3時からなのでもう少し時間があるだろう。

ロビーにいる招待客たちは、思い思いに談笑していて、すでに無料で配られている水割りに手を出している人もいた。

「あ、タケルじゃねえか！ やつと来たか。こつちだ、こつち。」

声聞こえた方を振り返ると、5、6人ほどの男女がタケルを手招きしていた。

「高校の時の友達だよ。アイ、行ってみよう。」

そういうと、タケルとアイは、その集団のほうに歩いていった。タケルは、みんなにアイを紹介し、アイに一人ずつを紹介した。アイは、笑顔で会釈した。

タケルは、夫婦で来ているらしい二人に

「そっぴや、高橋とヒロミって結婚したんだよな。悪かったなあ、式にいけなくて。」

と、声をかけた。二人とも高校時代の同級生だったという。

「まあ、ご祝儀その分弾んでもらったからいいわよ。」

「お前、露骨だなあ……。」

そのやり取りを見たタケルは、にやつと笑って「ちつとも変わってなさそうで安心したよ。」と言った。

その後、しばらく友人たちと懐かしそうに話してたが、その様子を見ていたアイには、タケルがなんだかとても子供っぽくみえた。

「ところで、主役は？」

会場を見渡して、タケルが聞いた。

「まだ、会ってないのかよ。なんか、向こうの方で挨拶回りしてた。」

「そうか。」

「スピーチは、タケルなんだろう？」

「ああ。」

すると、ヒロミが

「まだ、考えてないんでしょ？」と聞いた。

タケルがびっくりしたように「何でわかった？」と言ったので、アイは慌てた。

「ほ、ホントなの？」

「ウソだよ。大体は考えてる。後は自分に正直にってところかな。」

(…って、何を話すつもりなんだろう?)

アイは、それがとても気になった。

チラッと横目で見たタケルの表情は、とても穏やかだ。

多分、タケルの事だから、今聞いても『秘密。』とか言うのだろう。アイはそこを突っ込むのは止めた。その代わりに、

「大体って、大丈夫なの？」

「たぶんな。」

不毛だ…。アイは、ため息をついた。本当に大丈夫なのだろうか。

そんな様子を見て、高橋は「失敗したら笑ってやるから、安心して行って来い。」と、そしてヒロミも「そうそう、骨は拾ってあげるから。」

と行って、豪快に笑った。

「フオローになってねえぞ。似たもの夫婦め。」

タケルもそう言って笑っていた。

アイは、一抹の不安をぬぐいきれなかったが、タケルの高校時代を少しだけ垣間見れた気がして、とても嬉しかった。

「ん？ああ、シュウだ。」

高橋が、ロビーの入り口のほうを見て言った。  
タケルとアイが振り返ると、グレーのタキシード着た長身の男が、年配の男達に囲まれて笑顔で挨拶をしていた。

（あの人が…タケル君の親友かあ…）

タケルの言っていた悪ガキのイメージは全くなく、そこには見事に洗練された大人の男がいた。

「アイツが坂本修二だ。」と、タケルが言った。  
「なかなか、素敵な人だね。」

オレの事をオレより知っているヤツだ。

タケルは、彼をそう評していた。

（どんな人なんだろう？）

（タケル君は、どんな高校生だったんだろう？）

アイは、そんなことを考えていた。

タキシードの男が、二人に気が付いた。

タケルは、彼に向かって笑顔で軽く手を挙げた。彼は、タケルとアイをしばらくじっと眺めている。そして大きく頷くと、にこっと笑ってこっちに来いと言う風に手招きした。

タケルとアイは、彼のほうに向かって歩いていった。

タケルがシユウのタキシードを指差して「似合わねえな。」と言うと、

シユウは「未婚者は、自分の時のために、滅多な事言わないほうが身のためだぜ。」と笑った。

「坂本修二です。今日は来てくれてありがとうございます。」

と彼は微笑みながら右手を差し出した。

「初めまして、吉河 藍です。おめでとうございます。」

とその大きな手を握った。

「実は、凄く興味があったんだ。『あの』タケルの彼女がどんな子なのか。」

「私もです。『あの』タケル君の親友ってどんな人なんだろうって。」

「『あの』って、そんなにオレは珍しいのか?」

「お前は、全てに中性的というか、つかみ所がないだろ?それに、もっと喜べ。これだけ特別扱いしてもらってるんだから。」

「そうね、これは凄い事だよ。たぶん。」

アイは、たったこれだけのやり取りだったが、シュウがどこか自分に似ているという印象を持った。  
多分この人も、タケルの気が付かない、いろんなことまで気が付いてしまっただろうと思った。

アイは、シュウにタケルの事をいろいろ聞いてみたい衝動に駆られた。

高校時代のことや、『X』のことなんかを…。

そんなことを考えていると、シュウは、タケルに

「少し喉渴いたな、タケル、悪いが水割り持ってきてくれないか？」  
と言った。

「お？なんだ、招待客をこき使う気か？」

「そう言うなよ。まさか、こちらのお姫様にそんなこと頼めないだろ？」

アイは、ピンと来た。

（この人も何かアタシに話したい事があるんだ。）

タケルは、しょうがないなあと言いながらドリンクコーナーへ向かっていった。

「さて…と、最近タケルの様子はどう？」

シュウは、微笑みながらアイに尋ねた。

（やっぱりこの人は、全部知ってるんだ…。）

「しばらく様子おかしかったんですけど、最近は嘘みたいに穏やかなんです。何か問題抱えてたのがやっと解決したっていう風に…」

アイは、正直に答えた。

「タケル君、坂本さんと、もう一人合わせたい人がいるって…」

アイは、ずっと今まで胸に秘めてきた疑問を抑えきれなかった。

「様子が変だったのも、その人が原因じゃないかって…。その人…女の人なんでしょ？」

シユウは、アイをじっと見ていたが、にっこり笑って

「さすがだね、アイちゃんはオレのイメージどおりの子だよ。」

と言った。

「その子は、オレとタケルの青春そのものって感じだったよ。まあ、こんな事いうのも恥ずかしいけどね。

いろいろあったんだ。3人ともそれぞれに。それが、5年前にちょっと、すれ違いがあってね。

それからずっと疎遠になってたんだ。お互いを気にしながらね。今日は久しぶりに3人が揃うってわけだ。」

シユウは、懐かしそうに目を細めた。

「オレはその子の事が凄く好きだった。タケルもそうだったはずだ。結局、オレは振られたし、タケルともくっつかなかった。

けど、『ああ、そうか』とそう簡単に割り切れるほど、オレ達は浅

い付き合いじゃなかったからな。

まあ、タケルのほうの経緯はオレも詳しくは知らないけどね。でも、タケルの中じゃ、ずっと胸に引つかかっていた物があったんだろっな。その胸のつかえがやっと取れたんだろっな。」

「今日、私がここに来て良かったんでしょうか？」

シユウは、にっこり笑うとアイの肩をぽんとたたいた。

「タケルはこういうことに限っては口下手だからね。あんまり説明はしないだろうけど、アイツなりに過去に決着をつけたかったんじゃないかな。」

アイツがキミをその子に会わせたいって言ったならそれは、本心だよ。」

アイは、しばらくその言葉をかみ締めていた。

「なんか、不意打ちされたみたい。タケル君ずるいなあ。」

アイは俯いて、独り言のようにつぶやいた。

『だったらサ、後で、いじめてやるっぜ。』

その言葉にハツとしてシユウを見上げると、まるで悪戯っ子のような笑顔があった。

(なるほど…、悪ガキか。)

アイは、妙に納得してしまった。

「是非お願いします。」

シユウは、にっこりと笑ったアイの顔を見て安心したような表情を浮かべた。

「やばいな、そろそろ時間だ。控え室に戻らなきゃな。うちのお姫様はおつかないから。」

水割りはタケルに飲んでくれって。それ飲んでスピーチとちるなって言うておいて。」

シユウは、笑顔で軽くアイに手を挙げると、控え室に向かって歩き出した。すぐに青い顔をした係員が「困りますよ。ちゃんと準備して頂かないと。」とぼやきながらシユウに駆け寄り、急いで控え室に戻るように促した。

「主演は、花嫁なんだから問題ないでしょ。」

と、当たり前のように笑顔で返すシユウを眺めながら、

(さすが、タケル君の親友ね。)

と、アイは苦笑しながら思った。

入れ違いに、タケルが水割りを載せたトレーを手に戻ってきた。

「あれ？シユウは？」

「いま戻っちゃったよ。水割り飲んでスピーチちゃんとやってくれって。」

「何てヤツだ。」

タケルは、ため息をついた。

「何話してたんだ？」

「内緒」

「なんだそりゃ…まあ良いけど」

そう言うと水割りを一口飲んだ。

「坂本様・松田様、御両家の結婚式にご参列の方は、こちらの通路にご両家各一列にお並びください。」

式場の係員が招待客に向かって声を張り上げている。

タケルとアイも他の友人達とともに新郎側の列に並んだ。

しかし、新郎が待合所にこんな時間ぎりぎりまでいて、大丈夫だったのか…。

アイは、慌てる係員に連れ去られていくシュウの後姿をなんとなく目で追っていた。

ふと、シュウが立ち止まって振り返った。そして、こちらに向かつて何かを言つて、再び急ぎ足で歩き去つていった。

タケルは、「なんだ？何かあったのかな。」と首をかしげていたが、アイは思わず固まってしまった。

遠くて声は聞き取れなかったが、今、彼は確かにこう言ったのだ。

『3人目のお姫様のご到着だぜ。』

…と。

ホテルに併設されている教会で、厳かな空気の中、その式は始まった。

父親に導かれ、ヴァージンロードを静々と歩く花嫁…。

客席から漏れる、花嫁の美しさを賞賛するため息…。

花嫁はとても綺麗で、アイもやはり目を奪われた。

アイ自身、親戚や友人の式に何度か出席した事がある。勿論、実際の花嫁を間近に見たのは、初めてではなかったのだが、やはり何度見てもいいものだと思う。

純白のウェディングドレスに身を包んだ花嫁…。

自分がその立場に立つのはいつの話なのだろうか？

アイは、横目でチラッとタケルの表情を伺った。

タケルは穏やかな表情で、その様子を眺めている。親友の結婚式であれば、感慨もひとしおであろう。

まあ、タケルの事だから、新郎の姿を自分に置き換えてその情景を眺めてる…、なんてことはないのだろうか…。

式は滞りなく進行していく。

神父が2人にお決まりの説教をしていた。

アイは、さっきのシユウの台詞を思い出す。

3人目のお姫様のご到着だぜ。 & a m p ; n o t ;

その直後にぞろぞろと列に加わり、客席についてしまったので、よく周りを観察する暇がなかったのだが、少なくとも新郎の友人関係にそれらしき人物は見当たらなかった。

(坂本さんの見間違えだったのかな?)

一瞬そう思ったが、まして2人が好きだった人を見間違えるだろうか? そんなはずはないと思う。

油断しちゃだめよ!

ユキの台詞が頭をよぎった。

(ユキの言つとおりかもねえ...)

クスツとアイは微笑んだ。不思議と心が落ち着いていた。

(さーで、どんな人が出てくるのかな?)

アイは、静かに深呼吸する。何故か楽しみだった。

もしかしたらユキの言葉どおり『敵』かもしれないのに...。正面に視線を戻すと、ちょうど新郎新婦が誓いのキスをしていた。

一斉にフラッシュが炊かれ、まばゆい光が二人を包んだ...。

無事に式も終わり、会場では披露宴の準備が着々と進んでいる。それまでのしばらくの時間を、招待客たちは思い思いに過ごしていた。

タケルはというと、ロビーのソファに身を預けて、一人で何やらぶつぶつとスピーチの練習らしき事をしていた。

(全く…、ぎりぎりまで何もしないんだから…。)

アイはひよつとして、式の前にヒロミの言っていた

まだ、考えてないんでしょ？

という言葉は真実だったのではないかと、本気で疑い始めている。とりあえず、本番でタケルに恥をかいてほしくないアイは、そっとしておく事にした。

窓から見えるこのホテルの庭園がとても綺麗だった。

待っている間、少し外を散歩でもしてこようと出口に向かって歩き始めた。

その時、一人の女性客に目が留まった。

新婦の友人らしき集団の中に、その人はいた。

背は170センチ前後だろうか。

ダークグレーのパンツスーツを、この上なく完璧に着こなしていて、切れ長な瞳とすらっとした鼻筋は、宝塚の男役スターを連想させた。それでいて、誰よりも女性らしい優美な立ち振る舞いと優しいげな笑顔があった。

(この人だ…。)

今までずっとぼやけていた『X』の輪郭がまるでジグソーパズルの最後のひとピースのように、その女性とぴったり重なった。

理由はないが、確信はあった。

一瞬、なぜ新婦側に？という疑問が頭を掠めたが、その圧倒的な存在感の前に、そんな疑問は何の意味もなかった。

心臓が高鳴り、頭に血が上っているのが自分でもはつきりと分かる。アイは、しばらくその人から、目が離せなかった。

（この人が…『X』…。）

敵わない…

この人は自分に足りないものを全て持っている…そう思えた。

敗北感に打ちのめされたような、そんな気持ちだった。

ついさっきまでの『X』に会ってみたいという甘い気持ちは一瞬にして消し飛んでいた。

（何でアタシは、ノコノコこんな所まで付いて来ちゃったんだろ  
う？）

アイは、足早に、まるで逃げるように外に出た。庭園の脇のベンチに腰を下ろす。

泣き出したような気持ちだった。

（ユキ…あんたの言ったとおりだったよ…。）

何とか気持ちを落ち着けようと大きく深呼吸をしたが大して効果はなかった。

アイは、しばらくそのまま俯いていた。

ようやく少し気持ちを落ち着かせたアイは、タケルの言葉を思い出す。

なんせオレの半生の縮図がそこにある。

確かにそうなのだろうと思う。

タケルは、なぜ自分をここに連れて来たのだろうか？

もう一人会わせたいヤツがいる

それは、間違いなく彼女の事だろう。

それにシユウはさっきこう言っていた。

あいつなりに過去に決着をつけたかったんじゃないかな

恐らく今は、タケルと彼女はなんでもないのであるだろう。

しかし…。

(アタシにだって心の準備ってモンがあるでしょうが…。)

何の説明もなく、いきなり連れてきたタケルに対して怒りが沸いてきた。

「全く、酷いよなあ…。」

誰にともなくポツリとつぶやいた。

『ホントねえ。何考えてるのかしら…。大事な彼女をほったらかしにして…。』

突然、背後から聞こえた声に振り返ると、そこには、穏やかな笑みを称えた、あの『X』が立っていた。

冗談ではなく、本気で心臓が止まるかと思った。

背後に隙を作っちゃ駄目！

ユキの台詞がアイの胸に突き刺さる。

(笑ってゴメン！ユキ…あんたって子は、やっぱり天才だよ…。)

アイは、叫びだしたい気持ちを必死に押さえ込む。

今更じたばたしても仕方がない。覚悟を決めよう！

アイは、動揺を悟られないように、静かに息を吸い込むと、意を決して『X』を見上げた。

第11話 祝辞

1

懐かしい友人たちとしばらく話をしていると、ロビーから外に向かう人影が見えた。

（あの子だ…。）

クルツと辺りを見渡すと、ソファーであの男は、ぶつぶつと独り言のようになにやらつぶやいていた。

恐らくスピーチの練習をしているのだろう。

少し迷ったが、ミサキは友人たちに断りを入れて、あの子を追いかけて屋外の庭園に向かった。

『明日、アイも式に連れて行くよ。』

昨日、電話で郷谷タケルは唐突に切り出した。

いつもながら、単刀直入というか、回り道を知らないかのような口調。普段はそれほど口数の多くないタケルであるが、このストレートさこそが彼の本質である事をミサキはよく知っている。そして、いつもそれにドキッとさせられるのだ。

「アイって…、郷谷の彼女の？」

『他に誰がいる？』

「そりゃそうだけど…でも何でまた？」

『シユウのリクエストだ。本人も行きたがってたし。それに、斉藤にも一度合わせておきたくてね。』

「あら、私はついしてみたいな言い方ねえ。」

電話の向こう側から、苦笑する気配が伝わっていた。

『そんなこたあないよ。むしろメインだな。』

「そりゃどーも。」

内心ミサキは穏やかじゃなかった。あの時に、2人の距離を痛感させられたし、今の彼氏と分かれるつもりも無い。

とは言ってもそう簡単にすっきり割り切れるものでもなかった。それほどに郷谷タケルの存在はミサキにとって大きなものだったし、タケルにとってもそうであってほしいと思っていた。

だから、タケルが彼の彼女を、自分に会わせるとあっさり切り出した事はミサキにとっては面白い事ではなかった。

「まあ、確かにどんな子なのか興味はあるけどさあ…。」

『なんだよ、あんまり乗り気じゃなさそうだな。』

(どの口が言うか、どの口が…)

嫌味の一つでも言ってやろうかと思っていたら、

『なんとというか、原点回帰とでも言っつかないか。』

と、タケルが意味深なことを言った。

「どっついついどっつ。」

『オレにとつてのベーシックだからな。シユウと斉藤は。二人を抜きに今のオレはありえない。だから、二人にはアイと会ってもらいたかったし、アイにも二人に会ってほしかった。正直、オレだって最初は乗り気じゃなかったよ。トラブルの匂いでしたからな。』

「悪かったわね。トラブルメーカーで。」

投げやりな口調でミサキは言った。

『まあ、そう拗ねるな。斉藤がどうこうとか言ってるんじゃないよ。最初にシユウと久し振りに再会した時には、オレは、斉藤が離婚してた事すら知らなかったんだぜ。』

「でもこの間会った時には知ってたみたいじゃない？」

『シユウに聞いた。シユウはヒロミに聞いたって言ってたな。別にそれはいいんだけど。要は、オレもいろいろ考えたってことだよ。シユウの事も、斉藤の事も。』

「で、その結論がこの間のキスなわけ？」

『うーん、それなんだよ。問題は。』

「わけわかんないわ。」

『オレもだ。』

ミサキは、すぐ近くにある答えに手が届きそうに届かない焦燥に駆られていた。

タケルの言いたい事は、なんとなく分かる。けど、やっぱりはつきりしない。

『シユウが言うには、オレと斉藤は似ているらしい。』

「何それ？」

『さあ……。』

しばしの沈黙。どうやらタケルは自分の言葉に本当に考え込んでしまったようだ。

「アタシが、その子に会ってこの間のキスの事喋っちゃったらどうするつもりなの？」

ミサキは少し意地悪く聞いてみた。

『……困る。けど、会わせたい。だから、ますます困ってる。』

ミサキは大きなため息を吐いた。こういう厄介な男なのだ、郷谷タケルは。

自分が振り回しているようで、いつの間にか逆に振り回されている。そしてその厄介な男に惹かれていることもまた事実なのである。

「じゃあ、もし逆の立場ならどうすると思う？」

『逆の？…ふむ、斉藤がオレを彼氏に会わせようとしたらか…。どんな男なのかは、興味あるな。しかも、バイク乗りだし。でも、ちよつと気まずいよなあ、確かに。』

……なら、一度オレに会わせなよ。はつきりするだろ？」

無駄だ…この男に何を言っても…。ミサキはもう一度盛大にため息を吐いた。

『言つとくけど、オレだって、斉藤のことが美しい過去の思い出出っで簡単に割り切れてるわけじゃないんだぜ。でも、オレ達みたいな奴らがいてもいいんじゃないか？』

恋人同士にはならなくても、オレは一生お前と友達止める気はないしな。

勿論シユウともだけど。回り道しまくったけどオレ達3人の本来あるべき姿にやっと戻ったと言うか。』

「……まあ、そういう考え方もありかもね。」

ミサキは思い出す。かつて自分がシユウと別れた時に自分たち以上に心を痛めていたのはタケルだった。

「本来あるべき姿ねえ。ホントにそうだったらいいんだけどね。」

タケルは苦笑して、

『とにかく明日、アイに会ってやってくれよ。それと、そのうち斉藤の彼氏にも合わせてくれ。んで、その彼氏はバイク何乗ってるんだ？』

その後、2人は、しばらくバイク談義に花を咲かせた。

「あなたがアイちゃんね。」

アイより頭一つは身長がありそうなその女性は、穏やかな笑みを浮かべながら歩いてきた。

「私は、斉藤美咲。郷谷の友達よ。」

アイは、息を呑んだ。確かに凄い美人だし、スタイルもいい。モデルだと言われても納得してしまいそうだ。

普通に歩いているだけの筈なのに、吸い込まれそうな存在感がある。何か今まであったタケルの友達とは違うオーラと言うかそんなものがひしひしと感ぜられて思わず身構えた。もう一人紹介したいと言う人はもはや間違いない。この人だ。

「あ、すみません。アタシ吉河藍です。」

やっとそれだけを言ったが、なぜこの人が自分のところに来たのか。アイはミサキの言葉を待った。

「郷谷もしょうがないヤツね。アイちゃんほつたらかしにして。これで、中途半端なスピーチなんかしたら、物でも投げてやるうかしら。」

穏やかな笑顔で物騒な事を言うミサキに少しだけ緊張が和らいだ。

「あの、皆さんの高校時代ってどんな感じだったんですか？」

本当なら、タケル君とどんな関係なんですか？と聞きたかったがさすがにそこまでストレートに聞くことはできなかった。

そんなアイを見てミサキは少し驚いたような顔をしたが、すぐに表情を戻した。

「そうねえ、郷谷は昔は、今よりもっと無愛想だったかな。アタシはもっと酷かったけど。」

あったばかりの頃は喧嘩ばかりしてたし。シュウがいつも仲裁役で。でも、そうこうしてるうちに私は、随分明るくなったのよ。もう、人格変わったんじゃないかってくらいに。

私ね、中学の頃は人付き合いが苦手でいじめにもあったわ。」

「え？」

アイは、その言葉がにわかには信じられなかった。これだけ美人で存在感があつて、いじめとかそんなものには無縁じゃないかと思われたからだ。

「郷谷もシユウも出会いは最悪だったわね。やっと中学卒業して新しい環境で一から頑張ろうって思ってたところで、なんでこんなやつらと一緒に学校なわけ？って本気で自分の運の無さを呪ったわ。もちろん、二人のことよく知らなかったし、実際はこの2人に会えてホントによかったけどね。」

「最悪つて、どんな出会いだったんですか？」

「ふふ、それは私の口からはちよつとね。郷谷に聞いたらいいわ。」

なにやら、悪戯っぽい笑顔。アイはそれは後でタケルに問い詰めてやろうと思ひ、ここで追求するのは止めた。

それよりも今はどうしても聞きたい事がある。意を決してミサキの目をまっすぐ見つめた。

「あの…、斉藤さんは…。」

アイがそう言いかけると、ミサキは手をかざしてそれを遮った。言わなくても分かっているというように。

「ホント、アイちゃん分かりやすいわね。正直に白状すればどっちも好きよ。私はね。郷谷はいつも、私のピンチの時は力を分けてくれたし、シユウはいつも私を見守ってくれた。

何でだろう。タイミングが悪かったとしか言いようが無いわね。アイちゃん何処まで聞いているか分からないけど、高校時代から今までいろいろあつたわ。誰でもそうなんだろうけどね。」

で、結局3人友達同士よ。あきれちゃうわね。ホントに。郷谷が言

うにはあるべき姿に戻ったらしいわ。」

「あるべき姿…ですか？」

よく分からないといった表情のアイにミサキは元の穏やかな笑顔で言った。

「分からないでしょう？アイちゃんも厄介な男好きになっちゃったもんねえ。」

「うう、それは…。」

思わず顔を赤らめるアイを見てミサキは笑った。

アイに対する嫉妬の気持ちはある。何故自分ではないのかという気持ちはある。

けれども、この目の前の女性に対する嫌悪感はなかった。敗北感もなかった。

ただ、タケルの言っていた、本来あるべき姿と言うのが少しだけ理解できた気がした。

いつから自分はこんなに聞き分けが良くなってしまったんだろうか？

(全く、やれやれだわ。)

そんな事を考えて、小さくため息をついた。

ミサキは目を細めてアイを眺めた。

「アイちゃん、負けちゃ駄目よ。何かあったら私にすぐ言いなさい。いくらでもいじめてあげるわ。」

「さつき坂本さんにも似たような事言われました。」

それを聞いたミサキは思わず嘖き出した。さつきの自分を見つめるまっすぐな瞳。まるで猫のように表情を変えながらも確固たる意思を持っているその瞳。

不思議な魅力のある子だと思う。なるほど、郷谷はこの子に惹かれたのか。分かる気がした。

この子はきつとタケルとうまくいくだろう。同時に自分の目が完全に消えた事も悟った。

「そろそろ、いい加減あの男もアイちゃんがないのに気が付く頃でしょう。もどりましょ。」

ミサキは、アイを会場のホールへ促した。

アイは、一瞬躊躇したが、会釈してホールに向かって歩き始める。

アイは、3人の高校時代のことを知らない。

しかし同じ女として、アイにはミサキの気持ちだが、理屈ではなく感覚で分かった。

彼女は、自分の恋敵だ。

しかし、彼女は身を引こうとしている。

その相手がどんな人間なのか、どうしても確かめなかったのだ。

彼女の目に悲しみの色はなかった。

自分に対する敵意の色もなかった。

ただ、見届けたかった…、そんな、悲しいほどの強い意志を感じた。アイには、彼女に、かけるべき言葉が見つからなかった。

初対面なのに…、どうしても他人とは思えない…。

運命がほんの少し別の方向に傾いたなら、二人の立場は逆だったかもしれないのだから。

もしも逆だったなら、自分はどうしただろう？

ふと、そんなことが頭をよぎったが、慌てて振り払う。彼女に背を向け歩きながらアイは、心の中で詫びた。

そして彼女に、自分にはいない姉に対するような好感を持った。

その背中をミサキが呼び止めた。

振り返ったアイとミサキの視線が交差する。

「アイちゃん。斉藤さんなんて堅苦しいわ。ミサキでいいわよ。この先長い付き合いになりそうだし。ね。」

振り返ったアイは、この日一番の笑顔を見せた。

タケルの元に向かうアイの背中を見送った後、アイが座っていたベンチに腰を下ろした。

これで、ようやく自分も本当の意味で新しい一歩を踏み出せる。長く自分を縛っていた一つの恋心。

その呪縛から解き放たれ、悲しいのか、ホッとしたのかもよく分からなかった。

『本来あるべき姿』に戻った…。きっとそうなのだ。たったそれだけの事だ。

ミサキはどこまでも紅く広がる夕暮れの空を見上げて、一粒だけ涙をこぼした。

そして、舞台は着々とその姿を整えて、披露宴が始まる…。

2

『それでは、皆様しばしの間お食事とご歓談でお寛ぎください。』

司会者の声に、場の空気が緩む。

タケルとアイの座るテーブルには、高橋夫妻もいて和やかなムードで、あれこれと昔話に花が咲いていた。

アイは時折タケルの様子をうかがっていたが、タケルは、それぞれの話に相槌を打ちながら楽しそうにその話に加わっていた。

そのアイの様子に気づいたタケルは、ちよつとすまなそうな視線を送ったが、アイは特に気を悪くしたわけではなかった。むしろ、自分の知らないタケルを少しでも感じ取りたいと言う気持ちが強かったのかもしれない。

「皆さんから見てタケル君はどんな高校生だったんですか？」

というアイの質問に真っ先に答えたのはやはりヒロミだった。

「どうってねえ。ま、最初は無愛想なヤツだと思ったわよ。ちよつと変わってたわね。アイちゃんには悪いけどねえ。」

「ちよつと待て…。」

タケルが反論しようとする、すかさず高橋がそれを制した。

「あー、待て待て。面白いじゃない。ここはタケルは黙っとけよ。

アイちゃんだつて興味あるだろ？色んな視点から見た『高校生 郷谷タケル』の実情。まあ、何が出てきても時効つてことで。」

「時効つてなあ、犯罪に走ったことなんかないつもりだが…。」

そついいながらアイをチラッと見ると、その目がキラキラしていた。

(何を言っても無駄だな…)

「ああ、もう勝手にしろ…。」

「あ、お許しが出たわよ。それじゃ、どこから話そつかなあ。」

嬉々とした表情を浮かべる高橋夫妻を見て、タケルは、

「この似たもの夫婦め。」

と、あきれた顔でため息をついた。

「えー！それで、その後どうなつちやっただんですか？」

「それでねえ……………」

気が付けば、ヒロミとアイは異常なほどの盛り上がりを見せていて、さすがの高橋までもが、話に加われないほどだった。高橋は、タバコに火をつけて

「なあ、タケル。アイちゃんってこんなキャラだったのか？」

と、真顔で聞いてきた。

タケルは、「まあ、こんな感じだろ。」とやはりタバコに火をつけながら曖昧に返事をした。

（そっぴや、ヒロミのテンションの高さはなんかユキに通じるよな。だからか…）

そんなことを考えながら、正面の新郎新婦を見る。シユウは穏やかな笑顔を讃えていたが、どことなく居心地悪そうにしていた。まあ新郎なんてそんなもんだろうと思ったが、タケルは、ビール瓶を片手に席を立った。スピーチをする前に言っておきたいことがあったからだ。

「お疲れ。」

タケルがグラスにビールを注ぐと、

「ここにずっと座ってるのも中々ツライな。」

と、シユウはほっとしたように笑った。

「タケル、スピーチ次だぜ。大丈夫なのか？」

「今更ジタバタしてもしょうがないからな、成り行きだ。」

「マジか？」

「まあ、覚悟しておけ。」

タケルがニヤツと笑うと、

「もう一度言うけど、俺には、報復のチャンスがあることを忘れるなよ。」

と、シユウも不敵な笑みを見せた。

「残念だが、あつちで昔の話は暴露されまくってるからな。もうオレに怖いモンはないぞ。」

一瞬、『しまった!』と言う顔をしたシユウを見て思わず笑ってしまったが、そんなことを言う為にここに来たわけではなかった。

タケルは、まあそれは冗談だと言った後、少しだけためらったが、

「実は、少し詰まらない昔話でもしてみようと思ってる。あくまで、オレの視点でだけだな。」

「……………」

それだけで、シユウは全てを察したようだった。新婦の友人席にチラツと目をやった。

「任せる。好きにしろ。」

シユウは、笑顔でそれだけを言った。

タケルは、こういうところが、コイツには敵わないと思う。全てをわかった上で、何も聞かないし、余計なこととも言わない。自分を信頼してくれているのがわかる。

タケルは、新しいグラスにウーロン茶を注ぐと、花嫁に差し出した。

「初めまして、郷谷タケルです。」

「千晶です。話は一杯聞いてますよ。ミサキとも仲良かったんですよ？今度落ち着いたらゆっくり遊びに来てください。色々突っ込んだ話も聞きたいし。」

と言つて、シユウの方をチラツと見る。シユウは飲んでいるビールを嘔き出しそうになって、咳き込んだ。

タケルは堪えきれずに声をあげて笑った。

少しの間、タケルは千晶と当り障りのない世間話をした後自分の席に戻った。

ヒロミとアイはすっかり意気投合してしまつたらしくヒロミは自分や高橋のことも色々と話していた。

(まあ、なんにしても仲良くしてくれて何よりだ。)

そう思つて暫く黙つてその会話を聞いていた。

「あ、そうそう。さつき斎藤ミサキさんとお話したんですよ。」

「へー、ミサキと？」

タケルは、一瞬耳を疑つた。背中に冷や汗が落ちる。

「アイ、い、いつの間に。」

「あら、さつきよ。タケル君がスピーチの練習してて忙しそうだったから。素敵な人だね。色々聞いちゃったわよ。色々とね。まあ、内緒だけ。」

タケルは肝を冷やしたが、アイはなんだか機嫌が良さそうに見えた。

どんな話をしたのかは、激しく気になったが、それを自分が聞いてはいけないような気がして思いとどまった。

「中途半端なスピーチをしたら物投げてやるって言ってたよ。」

タケルが、新婦の友人席をチラツと見ると、ミサキは他の友達と楽しそうに話していた。

おそらく、ミサキがアイに話し掛けたんだろう。あえて自分がいないアイが一人の時を狙って。

ならば、やっぱり自分はそれを知るべきではない。出来ればちゃんと紹介したかったが。

(やれやれ……。アイツらしいと言うか……。)

自分の中では、すでに答えは出ている。今日ここに至るまでに随分と回り道をしたし、大事な人たちを傷つけたりもした。それらの上に今の自分がある。

(自分だけ逃げるわけには行かないもんなあ。)

皆の顔を見て最後の覚悟も出来た。

タケルは、アイの頭にぽんと手を置いて、

「任せとけ。」

と笑った。

『では、次に新郎の中学・高校時代のご友人である郷谷武様よりご祝辞を賜りとう存じます。』

同じ席のみんなに見送られて席を立つ。正面の新郎新婦の顔を見ると、二人とも穏やかな笑みを浮かべていた。

マイクの前に立って一礼した後、客席を見渡す。新婦友人席ではミサキがこつちをじつと見ていた。少しだけ微笑むと、ミサキはそれに答えるように小さく頷いた。それを合図にタケルは、淀みなく静かに話し始めた。

『只今ご紹介に預かりました新郎修二君の友人の郷谷武です。修二君とは中学時代からの長い付き合いですが、今日、自分がここにいられること、そしてこうしてスピーチをしていることを、とても嬉しく思っています。』

タケルは、お決まりの中学・高校時代のエピソードなんかを交えながら面白おかしく坂本修二の人となり

話していった。客席からは笑い声も聞こえ、新郎新婦もくすくす笑っていた。

アイの隣で、ヒロミが

「やるじゃん。タケルってこんなに話しうまいヤツだったっけ？」

と、感心していた。実際、アイもこんなに流暢に話しているタケルに今まで心配していたのが馬鹿馬鹿しく思えたほどだ。

ふと、タケルの顔を見た時、何か違和感を感じた。どこか苦しそうな、辛そうな雰囲気があった。

アイは、気になって新婦友人席を見ると、ミサキも似たような表情をしていた。正面の坂本も笑顔を浮かべているが、どこかぎこちない感じがした。

(何で……?)

タケルはこのスピーチで何かを伝えようとしている。その相手が坂本やミサキであることは、容易に想像できた。

オレと、今日式を挙げる坂本修二と、そいつが3人そろうのは、二十歳の時以来だ。

タケルの親友である坂本と、斎藤美咲。この二人と何があったのかはアイにはわからない。それぞれに、傷があるのだろう。坂本の言葉が脳裏に浮かぶ。

ああ、そうかとそう簡単に割り切れるほど、オレ達は浅い付き合いじゃなかったからな。

アイは、タケルの言葉を聞き漏らすまいと思った。

『一番多感な高校時代に修二君をはじめ、最高の仲間たちと出会えて、一緒に過ごせたことは、僕にとってとても意義があることでした。堅苦しい言い方ですが、本当に感謝しています。』

ここで、タケルはいったん言葉を区切った。

『さて、ここからは、皆さんにとってはつまらない、そしてこの場にはふさわしくない話かもしれませんが、どうかご勘弁ください。』

タケルは、客席を見渡した。ミサキは表情を変えずじっとこっちを見つめている。アイは、何かを察知したのか心配そうな目を向けていた。最後にシユウをチラッと見ると笑顔のままひとつ頷いた。タケルは小さく深呼吸すると、再び話し始めた。

『実は、僕が修二君から今日のこのスピーチの依頼を受けた時修二君と会ったのは、実に4年ぶりでした。また、僕らにはもう一人大切な親友がいるのですが、その親友ともこの5年間会っていませんでした。』

原因は少しずつの小さなすれ違い。それは、僕らが10年前に高校を卒業した頃から確実に訪れ始めました。

一つ一つは良くある話だったのかもしれませんが。しかし、それは僕らには決して無視できない、大切なことでした。

いつしかそのすれ違いは、ちよつとやそつとでは修正できないほどの深い溝となりました。

僕自身、何でそんなことになってしまったのか解からず、だから、どうしたら良いかもわからないまま、ただ、時だけが淡々と流れていきました。

時の流れは、とても残酷なものです。その瞬間のリアルな感情、記憶、色、音それら全てをまるで波が砂をさらっていくように少しずつ、でも確実に削り取っていきます。

しかしその全てを忘れることなんて出来ません。大切な仲間の思い出であればなおさらです。

そして、時は決してその場に留まることを許してはくれません。一

瞬たりとも立ち止まることは出来ない。

そんな僕らの気持ちはお構いなしに、時はただ、静かに流れ続けていきます。

もちろん辛いことだけだったわけではありません。

その後を訪れる新しい環境、新しい出会い、新しい感情。僕はそれらにずいぶんと助けられ、支えられて何とか過ごしてきました。ただ、どこか昔のことを引きずっている自分がいて、それが重い足枷になったまま、次の一步を踏み出せずにいました。』

ここで、タケルは、一度言葉を止めて小さく息をついた。会場は水を打ったように静まっていた。

誰もが、息を飲み、マイクの前に佇むタケルの次の言葉を待っていた。

その中で、アイは、打ちのめされたような気がしていた。タケルが今までそんな風に苦しんでいたなんて少しも考えたことはなかった。もちろん郷谷武と言う男は、感情を剥き出しにしたり、気軽に悩みを打ち明けるようなタイプの男ではないことは知っている。

でも、アイもタケルと出会って3年、タケルのことをずいぶん理解したつもりでいた。

そのささやかな自信が音を立てて崩れていくような気分だった。

タケルにとって自分の存在はどの程度なものなんだろう？

ほんの少しでもタケルの助けになっているのだろうか？

そんな思いでタケルを眺めていた。

ふと、タケルと目が合う。タケルはやはり、苦しそうな表情をしていたが、アイに気付くと、アイのそんな心境を知ってか知らずか、ふわっとやわらかく微笑んだ。

その笑顔にふつと気持ちが軽くなった。アイはそれに気づき、また考える。

自分はこんな風にタケルを癒してあげられているのだろうか？

「今回、修二君の結婚と言う大きな節目にあたって、修二君と再会してから、今日まで、本当に色々なことを考えました。あの頃の自分はどこをどう間違えたのだろうか。ずっと考え続けました。

もう一人の親友とも再会し、その全てがわかった僕は生まれて初めて、死にたくなるほどの後悔と言うものを味わいました。

何故あの時あいつの気持ちをわかってやれなかったのか。何故自分の本当の気持ちに気がつかなかったのか。

いや、違います。表面上の穏やかな友情を壊したくないという自分の欲に目がくらんで本当に大切なものに目をつぶっていた自分によやく気が付いたのです。

そんなことで、簡単に壊れてしまうほど、僕らの友情が安いものじゃないはずなのに。

僕は、心からこの親友たちを信じていたんだろうか。そんな事を思つて愕然としました。

この10年と言う年月は振り返ればあつという間でしたが、決して軽いものではありません。

自分の弱さゆえに大切な親友たちの足をあまりにも長い間停めてしまった。

それが、結果的に僕たちそれぞれにとって良かったのか悪かったのか、それは、問題ではありません。ひとつのものの見方の側面ではないと思います。

ただ、その時彼らの足を止めさせてしまったという事実と、その時にとても辛い思いをさせてしまったらうということ、そして僕自身それに目を瞑つてにのうのうと過ごしてきたことが僕の中で強い罪悪感として残っています。

僕は僕の最高の親友たちに謝りたい。長い間待たせてしまって本当にすまなかつた。

もしあの時こうしていたら…とは、誰でも一度や二度は考えることかもしれませんが、もしもの世界を覗くことは出来ません。そんな

ことは『今』に対する冒瀆であり、許されることではありません。人は時には決して逆らえませんが、いつでも時に翻弄され、過ぎ去った時を振り返って悔やみ、反省し、やがて、その時に癒される。僕らは、全ての過去の上に立って今を生きています。

過去に目を背けること。それだけはしてはいけない。それが今に真正面から向き合う唯一の方法なのですから。

つまらない話でしたが、今日どうしてもこのことを伝えたかった。僕がこの僕の罪に目を背けていたままでは、彼らの親友を名乗る資格がないと思ったからです。

だから、あえて、この場に相応しくない話をしました。その非礼を深くお詫びいたします。』

タケルは、言葉を止めて、深々と頭を下げた。

『修二君は千晶さんという大切な人と出会い、そして今こうして並んでここに座っている。それはとても素晴らしい事で、僕はそれをととても嬉しく思います。』

改めて今日新しい門出を迎えた修二君と千晶さんに、『本当におめでと。』心からこの言葉を送ります。』

タケルがゆっくりと客席を見渡す。

自分の10年分の思い。ほんの少しでも伝わっただろうか？

ミサキは、ハンカチで目元を抑えていた。シュウも唇をかみ締めてタケルを見ていた。

隣では詳しい事情は知らないであろう千晶も目に涙を浮かべている。自分も、もらい泣きしそうで、きゅっと唇をかみ締めた。

タケルは天井に目をやった後、アイを見た。

いきなりこんなことを話して、さぞかし驚いただろう。でも、アイ

にも聞いてほしかったことだった。

今は混乱しているかもしれないが、アイならばいずれちゃんとかつてくれるだろう。そう思えるほどタケルはアイを信頼している。アイは、さすがに驚いたようなシヨックを受けたような顔をしていた。でも…。

（まだ、そのくらいで驚いてもらっちゃ困るんだよなあ。）

タケルは、アイに向けてニツと悪戯っ子のような笑みを向けた。

『最後に…、ああ、我が儘ついでにこれだけは自分の言葉で言わせてください。』

唐突に、タケルの口調が変わった。先ほどまでの重い空気ではなく、すっきりした晴れやかな表情だった。

言いたいことを言えた安心感からだろうか。どこか悪戯をする子供のような笑顔だった。

アイはまだ頭を整理しきれていないまま、次のタケルの言葉を待った。

『さすがにこればかりは、オレ一人じゃ決められないから、確約はまだ出来ないけど…。』

そう遠くない将来に挙げるオレ達の式には、シユウと千晶さん、あと斎藤は絶対に出席してほしい。』

タケルはそう言うと、シユウの顔を見る。

「お前、ホントに好き放題言いやがって…。スピーチの時は覚悟しておけよ。」

と言つてニヤツと笑つた。

次にミサキを見ると、ハンカチを目に当てたまま大きく頷いた。タケルはそれを見て小さく頷き返いた。

『変則的ではありますが、以上をもって、友人代表のスピーチとさせていただきます。』

タケルはもう一度大きく会場に向けて一礼した。

4

スピーチを終えたタケルが会場の大きな拍手に包まれている。高橋は、ヒロミに向かって小声で囁く。

「な、なあ、今タケルひよつとして凄いこと言わなかつ…うぐうつ。」

「

しかし、その言葉は言い終わる前に奇妙なうめき声に変わった。ヒロミにテーブルの下でヒールの踵で足を踏まれ強制的に黙らせられたようだ。

野暮な真似はするなと言いたいのだろうか。

「あらあ？どうしたの？」

ヒロミは何事もなかったように澄ました笑顔で言った。

「まあ、色々突っ込みどころは多かったけど、アイちゃんの感想は？」

ヒロミは、真っ赤になっているアイにニヤニヤしながら尋ねる。どう見ても面白がっているようだ。

「…か、感想だったって」

(何だよ、自分だって気になってるんじゃないかねえか…)

高橋は痛みに顔を歪めながら、ため息をついた。

この後、席に戻ったタケルは、ヒロミに、私たちは式に招待してくれないのかとか、シユウとミサキだけ鼻肩してずるいとか、散々突っ込まれ、高橋と二人で必死になだめ続けた。

アイは、まともにタケルの顔を見ることが出来ず、逆にあれこれ騒ぎ立てるヒロミに感謝していたが…。

「あー、あつたまきた！」

ヒロミは、まだ、納得のいつていない様子であったが、何かを思いついたように、彼女のハンドバックをこそそと探り始めた。

「なに捜してるんだ？」

「良い物！あつたまきたから、『取って置きのタケルの恥ずかしい過去をアイちゃんに公開』の刑よ！」

「おいおい、何する気だよ。」

タケルは、心配そうにヒロミを見る。

ヒロミが取り出したのは一枚の写真だった。

「ホントはシュウにあげようかと思ってたんだけど、気が変わったわ。アイちゃんにあげる。高一のときのお宝写真よ。」

その写真には、制服姿のタケル、シュウ、ミサキの三人が写っていた。

タケルは、鼻に大きなガーゼを当てていて、やたら不機嫌な顔をしている。ミサキも同じく不機嫌そうな顔をしていて、二人は目も合わそうとしていない。

中央で、困ったような顔をしているシュウが写っていた。

「えー！これタケル君？わ、若い！それになんで怪我してるの？」

大きな声をあげるアイにタケルもその写真を覗きこんだ。一瞬にして、タケルの顔から血の気がうつせる。

「若いって…。15の時だから当たり前だろ。ヒロミ、お前なんでこんなもんを持つてるんだよ…。」

「あら、いいでしょ？あたしが撮ったんだから持ってて当然じゃない。」

澄ました顔で言うヒロミにタケルはため息をついた。

「よりによって一番思い出さくない過去を…。」

「大切な親友との出会いのきっかけの事件じゃない。そんな事言っ  
もんじゃないわよ。」

ヒロミは『勝った』というような得意げな顔をしている。

アイは、ミサキが最悪の出会いと言っていたのを思い出した。

「事件って?。」

ヒロミは大袈裟に驚いた顔をして

「あらあら、しゃべっちゃってもいいのかしら? 困っちゃったわね  
え。」

と、いかにも楽しそうにタケルの顔を覗きこんだ。

タケルは、もう一度大きなため息をついた。

「…止めても無駄だろうが。」

「わあ、アイちゃん良かったねえ。お許しがでたわ  
「ほんとに相変わらずだな…。」

もはやヒロミも、アイも止めることは不可能なのはわかっている。  
何故自分の周りにはこんなヤツらばかりなのか? タケルは三度ため息  
をついた。

「あのねえ、これは高校に入学したばかりの頃なんだけどね。特に  
タケルとミサキは最初仲悪かったのよ。もはや、天敵レベルだった  
わね。」

「天敵…ですか？」

「そうよ。その事件つてのが笑えるのよ。高校入ったばかりの頃、ミサキが朝の通学電車で痴漢に会ったの。あの子も強気な性格だから、泣き寝入りなんか絶対するような子じゃないし。」

それで、その痴漢を殴り倒しちゃったのよ。ところが、実はその殴った相手は痴漢じゃなくて近くにいたタケルだった。

凄かったのよあ。タケルつてば、殴られて電池切れみたいに膝からガクンって崩れ落ちたもの。」

アタシは、ミサキと同じクラスだったんだけど、その時はまだミサキと話したこともなかったのよねえ。

同じ車両のちよつと離れたところからその一部始終見てたんだけど。あれは、最高だったわ。」

もし、ミサキが男だったら間違いなく一目惚れしてたわね。実際あの子はやたら後輩の女の子にモテたしねえ。」

それから暫く、ミサキはタケルを完璧に痴漢扱いしてるし、タケルは、殴られたのを根に持ってるし。」

「それは確かに最悪かも。この顔のガーゼって…。」

隣でむすつとした顔で聞いていたタケルは、ようやくその重い口を開いた。

「…アイツに鼻折られたんだ。」

アイは、もう一度写真に目を落とし、この上なく不機嫌そうな二人の表情を見て思わず笑ってしまった。

高橋も、思い出し笑いをこられきれないような不思議な表情をしていた。

タケルだけは、むすつとしていたが…。

「この写真のタケル君ってなんか、かわいいかも。」  
「アイ、頼むからやめてくれ……。」

うなだれるタケルを笑い声が包んだ。

自分の知らないタケル。今のタケル。これからのタケルと自分。まだまだ知らないことがある。それが当然だ。

そんなことである事なんてない。この先、お互い少しずつ知っていけば良いことだ。二人でゆっくり歩いていけばいい。

アイの中ですつと、心が軽くなったような気がした。

さっきのタケルのスピーチ。そしてその最後の言葉。

自分はそれを信じ、自信を持ってこの人と歩いていこう。

(今日、この日を決して忘れない。)

アイは、そう思った。

テーブルに置かれた、アイスコーヒーに少しだけミルクを入れる。しかし、あえてかき混ぜたりはしない。

じわりとグラスの中の黒を侵食していく白。自然に任せて移り変わる白と黒のコントラストを視覚的にも楽しむのをタカユキは好む。だが、今はそんなことを優雅に楽しんでいる場合ではないようだ。

「ねえ！ちゃんと聞いているの？」

「で…？俺にどうしろと…？」

「そりゃー、アタシだって早まった事をしたと思ってるわよ。でも、しょうがないじゃない…。誰だって、自分の親友が電話の向こうで泣いてたら、自分が一肌脱いでやろっつて思うでしょう？」

「だからってなあ……………」

アイスコーヒーを一口飲んだタカユキは、こめかみを押さえて小さくため息を付いた。向かいの席には、ばつの悪そうなユキが、すぎるような目でこちらを見つめている。

「どうしてお前はこう、そそっかしいと言っつか、突っ走ると言っか…。まあ、それがお前の持ち味でもあるんだろっつけど。」

ユキの表情がぱっと明るくなる。

「え？やっぱり？アタシもそう思うのよ。前向きと言っか行動的というか。」

「馬鹿。褒めてない！夜中の二時にタケルの部屋に殴り込みをかけただと！？少しは成長しろ！！」

タカユキの一声に、ユキは再びがっくりと肩を落とした…。

昨夜、問題の結婚式に出かけたアイを心配して電話をかけたユキは、アイが涙声なのに気づいた。  
当然、何があったの？と、アイに問い詰めたのだが、アイの返事はいまいち要領を得ず、

「そんなんじゃないの。」

「大丈夫、心配しないで、ほんとに大丈夫だから。」

と繰り返すばかりだった。

となれば…、自分のとるべき行動は一つしかない！

その時のユキには、そうすること以外の選択肢は考えられなかった。とにかく行動あるのみ。

もう遅いから明日にしようなんてことは、考えもしない。愛車の赤いローバーミニを飛ばす事30分。

玄関のドアをぶち破らんばかりに叩く。インターホンは勿論あるが、そのほうがそれっぽいなと思ったからからだ。

やがて、酷く眠そうな顔のタケルがドアを開けた。

そこには、険しい表情で、何故かゴルフクラブ（5番アイアン）を持った橘ユキの姿。

一瞬でタケルの眠気が吹き飛んだのは言うまでもない…。

この時、ユキがタケルから聞いたのは、披露宴のあとタケルがアイに正式にプロポーズをしたことと、  
ゴルフにはあんまり興味が無い事、そして、睡眠不足なので今日は寝かせてほしいと言う事だった。

ユキは、ようやく自分がとんでもない勘違いをしていた事に気づき、

『すみませんでしたー！！！！』

と、一言謝って、逃げるように引き返したのである。

「だって…、まさか、そんな展開になってるなんて思わないじゃないの。」

タカユキは、面倒くさそうに頭をかいて、アイスコーヒを煽った。

「まあ、確かに俺も驚いたけど、お前の行動のほうがよくよっぽど衝撃的で、タケルのプロポーズが霞んで見えるぞ。」

「うう…、アタシが悪う御座いました。何とか郷谷先輩とアイのフオローをお願いします…。」

タカユキは大きなため息を吐いた。

「もう、二人には電話しておいた。お前は少し反省しろ。」

ははー、と大きさに頭を下げるユキをみてコリヤ駄目だなど思ったが、それは口に出さなかった。

「でも、あの二人ホントに結婚するんだね…。」

「まあ、順当だろ？」

「そうなんだけどサ。」

「けど？」

タカユキはユキをチラツと見て、ニヤツと笑った。

「まさか、お前、まだタケルに未練あるのか？」

ユキは慌てたようにぶんぶんと首を振った。

「そんなんじゃないわよ。ただ、ちよつと感傷的な気分浸ってただけよ。」

「感傷的ねえ…。」

それは分からないでもない。アイとも、タケルとも付き合いの長い二人には、大事件だと言える。

(タケルのヤツ…、ようやく結論が出たってことか…。)

「タカちゃん？どうしたのよ？静かじゃない？まさか、タカちゃんアイに…。」

タカユキは、ギロつとユキを睨むと、

「戯け…。」

と、言っつて残りのコーヒーを飲み干した。

「お前のおかげで疲労困憊なんだよ。」

ユキにいつもやり込められているタカユキは、彼女が笑顔を引きつらせる様子を眺めながら、しばらくは、このネタで引っ張ろうと心

に決めた。

2

「わざわざ呼び出して悪かったなあ。」  
「ううん、いいよ。この間は、ゆっくり話もできなかったしね。でも、いいの？こんなところで油売ってて？」

3週間後…。テーブルを挟んで坂本修二と斉藤美咲が向かい合って座っている。二人とも、とても穏やかな表情で…。

「いつ帰ってきたの？ハネムーンから。」

「おとといだよ。なんだかんだで忙しかったからいい休養になったよ。」

「千晶のほうは？順調なの？」

「ああ、定期健診でも問題ないって。予定は年末だそうだ。」

「しかし、シユウもパパになるのねえ。」

ミサキはちよつと目を細めた。

「なんだよ。そんなに意外か？」

「ううん。これ以上似合う人もそうはいないでしょ。」

シュウは、笑いながらタバコを取り出した。

「悪いな。家じゃ吸わせてもらえないもんでね。」

そう断って火をつけた。

「子供はどつちなのかもう分かってるの？」

「いや、俺は早く知りたいんだけど。千晶が絶対いやだって聞かないんだ。」

ミサキは、「そう」と言っつて、ダージリンティに口をつけた。

シュウもミサキの過去を聞いているだけに、それ以上は何も言わなかった。それが、ミサキにはありがたかった。

「でも、いいわけ？千晶に睨まれるのはいやだからね。」

「あははは、千晶にはちゃんとミサキに会ってくるって言ってるよ。一緒に来るか？って聞いたんだけど、積もる話もあるだろうからって。」

「そうなんだ。」

「それに、親友に会うのに理由が必要か？」

「まあね。」

親友…こんな間柄になるまでに随分と時間がかかったものだ。ミサキはそんなことを考えて苦笑した。

「タケルには感謝してるよ。」

ミサキはシュウの口からでた意外な言葉に驚いた。

「シュウが郷谷に？」

「ああ。」

「俺自身、ずっと心に引つかかってたからなあ。ミサキのことは。今回の一件でようやく俺も解放されたような気分なんだよ。」

「解放ねえ…。」

それは、今のミサキにはよく分かる。時間はかかったが、振り返ればいつもその中心に郷谷タケルがいた。今度のことが無ければこうして、また、向かい合って座って話すなんて、一生無かったかもしれない。

「本来あるべき姿に戻ったってことね。」

シユウは、右の眉をあげると

「うまいこと言うね。」  
と笑った。

「まあ、郷谷の受け売りだけどね。」

「へー、タケルがねえ。」

「言った本人すら意味分かってるんだか、分かってないんだか…。」  
「アイツらしい…。」

二人は声を上げて笑った。

「式の前にタケルに会ったんだって？」

「うん、やっぱり知ってたか。」

シユウは、オーバーに手を広げて

「俺が知らないわけないだろ？」  
と言った。

「色々話したわよ。まあ、空白の5年分くらいは話したんじゃないかしら。高校のころは顔あわせれば喧嘩ばかりしてたからなあ。あの頃の全部足しても、足りないくらいには話したかもね。」  
「少しは、埋まったのか？」

シユウはあくまで穏やかだ。ミサキはその表情を見て、ああ、やっぱりシユウだなあと、自分でも意味不明なことを思った。

「さあ、どうだろ？まあ、郷谷もそうだったんだろうけど、あの頃の私も相当ガキだったってことはよく分かったわ。それが分かっただけでも収穫よ。」

「そりゃ、俺だって同じさ。」

「なんていうか、年取るのも悪くないかなってね。」

「おいおい、まだ、30前だろう？」

「あははは、私だってまだまだって思ってるよ。」

やれやれといったように、シユウは首をすくめた。

「そつえば、郷谷に聞いたんだけど、私と郷谷が似てるってどういうこと？」

「なんだ、アイツそんなことまで言ったのか…。」

「うん。言ってた。ちょっと興味あるわねえ。」

シユウは、ちょっと考えるようになしぐさをすると、ニヤッと笑った。

「やっぱりお前と同じサルから進化したやつらだと思っぜ。」

「サルって…。随分な言い方じゃないの。」

むっとした様な表情のミサキに、

「自分で考える。今度会うときまでの宿題だ。」  
シユウは笑いながらそう言った。

「さーて、そろそろ帰らないとな。」

「そうよ。あんまり妊婦さんほつといちゃ駄目よ。」

「はいはい。まったく、マタニティブルーって女の人だけにある言葉じゃないよなあ。」

「そんなこと、千晶の前で言えるの？」

「言えないから、ここで言ってるんじゃないか…。」

ミサキは、声を上げて笑った。なんとなく二人の力関係が見えた気がして…。

「まあ、そのくらいで丁度いいのよ。多分ね。」

「はいはい…。」

レジで会計を済ませて店を出ると、ミサキは、店先に止めていたバイクのエンジンを掛けた。

「ホントに送ってかなくて大丈夫？」

「ああ、大丈夫だよ。逆方向なんだから。それにちょっと怖いし。」

「どういう意味かしら？」

「…何でもありません。」

シユウに睨みをきかせた後にヘルメットを手を取ったミサキは、シユウがまだ心配そうな表情で見ていることに気づいた。

「何よ？本当に大丈夫だったら。結構運転うまいのよ。」

「いや……。」

「何よ。らしくないわね。」

「なあ……、お前、本当にこれで良かったのか？」

きつと、今日シユウはこれを聞きたかったんだろう。ホントにシユウらしいと思った。

ミサキは、大きな音でエンジンを吹かすと、

「さあね。答えはまた10年後よ！」

エンジン音に負けない声でそう言った。高校時代のような自信にあふれた笑顔を浮かべながら……。

その、翌週の日曜日。空には、この国が梅雨である事を忘れてしまったかのような見事な青色が広がっていた。

だが……。

「……こりゃー、どういうことだ？」

「見たままだろ？素直に受け入れろよ。」

タケルとシユウが並んで河川敷の土手に座っている。呑気にお茶なんか飲みながら……。

その横でタカユキが信じられないようなものを見る目で土手の下の光景を眺めていた。

「タケル、何で止めない？お茶なんか飲んでる場合か？」

「止めて止まるヤツだと思ってるのか？」

それは、タカユキもよく知っている。しかし、そういう問題ではない。

「緊急事態だから、どうしても来いって……。しかも、バイクでつて

……。」

「十分に緊急だったし、バイクでなきゃ意味が無かった。」

「お前なあ……。」

「大丈夫だ。公道じゃないから法的には問題ない。」

その土手の下では……。

「ほら！ふらふらしない！手じゃなくて膝で押さえるの！膝よ！」  
「はい！」

「まだ、肩に力入りすぎ！視線はそんな近くじゃなくてもっと遠くに！」  
「はい！」

2台のバイクが河川敷の大きな駐車を並んで走っている。殆ど車はいないので、見通しのよい、巨大なスペースだ。

一台はミサキ所有の250ccの外車。そしてもう一台にはアイが乗っている。ちなみに彼女にとつて、生まれて初めての経験だ。

シユウの結婚式の後、アイとミサキは急激に親しくなった。ミサキ曰く、「妹同然！」なんだそうだ。

アイは、ミサキがバイクに乗っている事を知って、どうしても自分も乗ると言い出した。以前から密かに興味はあったらしい。

あの猫のような目がキラツと輝いた時、もう誰にも止められない事を知っているタケルは、一応止めようとしたが、見事に玉砕した。

彼女の言い分は「タケル君がバイクやめるなら我慢する。」と言う事だ。

これを聞いた瞬間、タケルは折れた。そして、どうせ乗るのなら、ちゃんと練習するべきだと言ったのだが、この時すでに、アイとミサキの間では、教習所に行く前に少しくらい触っておいたほうがいいという話になっていて、次の休みに、ミサキがアイに手ほどきをする約束までがこっそり取り交わされていた。  
となると、次に問題なのは練習用のバイクだ。

ミサキのは、250ccとはいえ、かなりクセのあるレーサータイプの外車で、しかもあちこちいじっている。初心者にはちよっときついだろう。

かといって、タケルのは、900ccの大型バイク。これも小柄な

アイには、まず無理だ。  
と言う事で、しばし思案に暮れた3人と、たまたまタケルからこの話を聞きつけたシユウだが、その問題は意外なほどあっさりと解決する。

「それで、俺が呼び出されたわけか…?」

「そういうことだ。」

さらっと答えたタケルにタカユキは再び言葉を失った。

タカユキは、タケルがバイクに再び乗り始めた頃、それに影響されて免許を取った。

そして、400ccのバイクを買ったわけだが…。なかなか仕事が忙しいのと、車を買ったことで、すっかりバイクから遠ざかっていったのだ。

しかし、やはり、自分のバイク。かわいくないはずはない。

「いいじゃねえか。大人気ないな。せつかく久し振りにエンジン回してやってるんだから。」

「そういう問題か?ましてや、初心者どころか今日始めて触るやつに…。俺の大事な…。」

タケルは、驚いたような顔を見ると、隣のシユウに大げさに言う。

「聞いたか!シユウ。何て冷たいヤツだろう? 自分のバイクの心配しかしてないぞ。これが北村タカユキって男だ。」

シユウも、神妙な顔で頷きながら

「そりゃー、いただけないなあ。」

と追い討ちをかけた。

うつつと言葉に詰まったタカユキに、シユウが、すかさず「まあまあ」とお茶を差し出すと、

タカユキは、仕方なく二人に並んで腰を下ろした。

全て、彼らのシナリオどおりだ。

「そんで、ユキはどうなんだ？」

問いかけたタケルに、タカユキよりも先に反応したのはシュウだった。

「ユキ？ああ、『あの』…。」

「もう、そんなに名前売れてるのか…。アイツは…。」

くすくすという笑いを漏らすシュウにタカユキは小さくため息を付いた。

「ユキは今日は謹慎中だ。タケルとアイにあわせる顔がないらしい。何でアイツはいつまでたってもああなのか…。」

「気にしてないから、次は絶対来いつて言つといてくれ。」  
そういうタケルも笑いをかみ殺している。

「それより、オレはそんなこと聞いてるんじゃないぜ。」  
「何だよ？」

不思議そうなタカユキにタケルはニヤツと笑う。それを見たシュウも瞬時に理解したようだった。

ツーンポ遅れて、ようやくその意味に気がついたタカユキは

「別に、今までどおりさ。」  
と、眉間にしわを寄せながら言った。

「お前は、人のことには気が回るけど、自分のことになるとぜんぜ

んだからなあ。」

「まさか、お前にそんなこと言われる日が来るとは思わなかったぞ…。」

タカユキは落ち込んだような情けない顔で、肩を落とした。

「確かに郷谷タケルに言われちゃショックだろうなあ。」  
「シユウも全面的に同意する。」

「人は成長するって事だ。まあ、せいぜい頑張れ。」

「それが、頑張れって態度か？」

タケルとシユウは大声で笑った。

「あーーーーー!!!あぶねえ!」

遠くのほうでアイがバランスを崩したのが見える。タカユキは思わず立ち上がった。しかし、タケルは涼しい顔でそれを眺めていた。

「大丈夫だよ。あのくらい。立て直せる。さつきから見ただけど、アイも初めてであそこまで乗れば上出来だぜ。やっぱ、元から運動神経はいいみたいだな。斉藤の教え方もいいんだろうけど。」

「タケル!お前なんでそんなに冷静なんだ!？」

「タカユキ、みつともねえぞ、腹くくれよ。」

「そんな事言ってもなあ。まだローンだつて…。」

「やれやれ…。」

大分慣れてきたアイは、ミサキの後についてスラローム（ジグザグ

走行)の練習をしていた。  
ミサキも覚えのいい教え子に気を良くしたのか、なかなかの熱血教官ぶりだ。

しかし、初めて乗ったアイにそこまで教えることが信じられないタカユキは気が気じゃない。アイがよろけるたびに、大きな叫び声を挙げていた。

「もう我慢できん！行ってくる！」

タカユキは、そういい残すと、ダッシュで土手を駆け下りていった。

タカユキが走り去った後、シユウとタケルはくすくす笑いあった。

「逃げたな……。」

「そうだろうな……。」

「そのユキって子はそんなに強力なのか？」

「かなりね。」

クククつとタケルは含み笑いをもらす。

「北村君は大丈夫なのかな？」

「まあ、タカユキ以外にユキの相手役が務まるヤツはいないよ。」

シユウは首をすくめて、

「だったら、さっき本人にそう言ってやりゃ良かったのに……。」

「それじゃ、つまらないだろ？」

そう言ってタケルはニヤツと笑った。

6月の日曜日にしては珍しい晴れ渡った空。体を通り抜ける風は、初夏の匂いがした。

たまには、こんなんびりした日曜日もいいもんだ。タケルはそう思った。

「俺たちも29だもんなあ…。」

シユウは芝生にごろんと寝転がった。

「ああ、早いもんだな…。」

お茶を飲みながらタケルが答える。

「高校出て10年か…。」

「そうだなあ…。」

「この10年、色々あったもんなあ。」

タケルも芝に寝そべった。

「10年後はどうなってるんだろっつな？」

「さあ…。よく分からないけど…。面白そうな気はするな。」

「そうだな。」

「10年後と言えば、オレたち39だぜ。想像つくか？」

「無理だな…。」

「色々あるんだろっつなあ。」

「そりゃー、あるだろ。」

「10年後、『俺たちの明日はどっちだ?』ってどこかあ？」

タケルは、ちょっと考えてから、がばっと起き上がる。

「じたばたしてもしょうがねえ！10年後に分かるさ！」

シユウも大きく伸びをして、ゆっくりと起き上がった。

「やっぱ、お前とミサキは同じサルだ。」

「なんだそりゃ??」

タケルはよく分からないといった、なんともいえない表情をした。

それを見たシユウが、いつものように穏やかな笑みを浮かべながら

「説明するのも面倒くせえから自分で気づけ。」

と言うと、タケルもいつものように

「やれやれ…。」

と返した。

おそらく休憩をとるのだろう。ミサキとアイが並んでこっちに歩いてくるのが見える。

その後ろからタカユキがなにやら言っているようだったが、彼女たちの耳には届いていないようだ。

タケルとシユウは顔を見合わせて小さく笑うと、軽く手を挙げて三人を手招きした。

これからの10年、そしてその先の10年、さらにその先の10年

…、どんなことが起こるのだろうか？  
楽しい事だけではないだろう。辛いことだってたくさんあるに違いない。

でも、オレにはこれほどの仲間たちがいる……。大丈夫！何が起きたって…。

タケルは、素直にそう信じることができた。

（了）

最終話 十年（後書き）

この作品は、何年か前に生まれて初めて書いたものに、いくらか手を加えたものです。

読み返すと、恥ずかしい…。

でも、初めて書いた長編で完結までたどり着けたという思い入れのある作品でもあります。

出来はともかく…。

感想なんか頂けるとうれしいです。

次回作の参考にさせていただきます。

最後まで読んでくれた方に感謝をこめて…。

s o f i e e

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9577b/>

---

10years

2010年10月9日07時57分発行